

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十五卷 第四号（通卷二九二号）

万象

B A N S Y O

七月号

2026. 7



七月の句

よろけ杖毛虫潰してしまひけり

小林 愛子

言葉の宝箱のような句集「くれのおも」所収の一句です。

句会の帰り、道の真ん中に一匹の小さな毛虫を見つけ、端へ逃そうと毛虫の周りを杖でトントン。次の瞬間、杖は毛虫を貫いてしまった。

「よろけ杖」に先生の複雑な気持ちが読み取れます。句集の毛虫は先生の中に永遠に生き続けます。なんとも羨ましい毛虫です。

（星野信子）

令和八年

七月号

万象

BANSYO

くもりなき一つの月をもちながら
浮世の雲に迷ひぬるかな

一休禪師

万 象

令和8年7月号

主宰作品

鳥の歌

江見悦子 4

万象の窓⑤②

「梅檀」創刊二十五周年祝賀会に参加して

江見悦子 5

名誉顧問作品

春の虹

小林愛子 6

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

7

風音散歩④④（七月号）

小林愛子 10

同人作品

江見悦子選

11

同人作品の佳句

江見悦子選 31

同人会だより

春の闘病記

中本 清 32

5月の「万象」オンライン同人句会高点句

俳句カレンダー掲載句自註

昨日とはちがふ風吹く晩夏かな（七月）

中村 千久 33

珈琲ぶれいく⑦④

..... 33

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（五月号）

沢辺たけし 34

同人特別作品

喜望峰

広瀬 俊雄 36

桜の頃

木内 マヤ 37

特別作品評（五月号） 萩野加壽子 38

私のこの一句 紅露 恵子・大内マキ子・小川 明美・豊田 高子 39

続・風のしをり^{③①} 沢木欣一の指標と信念（一） 中山純子 編集部 40

万葉の抒情^{③⑤} 『万葉集』にたずねる抒情の源流^{③⑤} 橋本 清 41

万象ノオト「トマトケチャップ」 岡 元枝・筑地 裕子・島崎 洋 42

「この本の一句『遠富士』（月刊「俳句界」より転載） 山本 晴美・松井 宣夫・富田 洋子 44

万象作品

江見悦子 選 45

北から南から 川崎宿（神奈川） 大久保 進 55

万象作品の佳句 江見 悦子 56

新中央句会報（4月例会） 58

薄荷飴日月譚 プリズムに少年の日の夏の色 中村 千久 60

第19回「万象」千葉県支部俳句大会 報告 中嶋 久登 61

「万象」組織と業務分担（令和8年7月から） 62

ルビーの小函（七月号） 編集部・校正担当 63

東西南北 64

鳥の歌

江見悦子

(主宰)

春惜しむ仕掛け時計の鼓笛隊
アルバム君らの若さ桜実
橋多き川に夏潮さし来る
漁しまふ地に飛ぶばかり茅花の穂
船橋二句
潮錆びのトタンの小家海芋咲く
鳳梨提げいつもの八百屋素通りす
薄暑光カタルーニヤ語の「鳥の歌」

「梅檀」創刊二十五周年祝賀会に参加して

江 見 悦 子

5月16日、「万象」の僚誌である「梅檀」の創刊二十五周年記念の祝賀会に伺いました。主宰は辻恵美子さん、「風」以来のお仲間ですが、私が「風」に入会した時には若手のホープとして知られ、34歳で「風賞」、39歳で「角川俳句賞」受賞と、勢い盛んな活躍でした。「角川俳句賞」作品は「鵜の唄」と題され、岐阜の長良川の鵜飼をテーマにした50句。四季を通して鵜小屋を訪ね、鵜匠の暮しをつぶさに詠い、鵜の生態に迫った意欲作、定点観察が見事に実った作品群です。

当日は、東京駅発6時台の列車で金華山を望む岐阜のホテルまで。午前中の大会最後の講演に間に合い、岸本尚毅さんの「文豪と俳句」を拝聴しました。幸田露伴から始まり、夏目漱石、永井荷風まで、自著をもとにされた講演50分間に興味が尽きませんでした。

「梅檀」は、「万象」とほぼ同時期の平成14年5月に創刊された主宰誌です。24年間にわたって主宰を務められた辻さんの力と努力に敬服します。午後の祝賀会は、壇上の盛花に梅檀一枝が掲げられ、主宰の下に皆さんが生き生きと動いて会を進行させていました。

現在「風」の僚誌として、「春耕」「梅檀」「伊吹嶺」「雉」「なると」「万象」があります。又「きたごち」の後継誌として「しろはえ」、静岡の「季節風」が「風」の流れを引き継いでいます。

祝賀会後の夕方、辻さんの案内で鵜匠の家を訪ねて鵜小屋を見学し、鵜匠の杉山さんから直接お話を伺う機会を得ました。長良川の鵜飼は信長が保護して以来千三百年の歴史を持ち、家康も鰯鮓を好んで献上させていたそうです。ここ長良川の鵜匠は、明治時代からは「宮内庁式部職」の身分となり、6名が世襲で受け継いでいます。国家公務員なのです。

とつぷりと暮れた闇の中、花火の音で始まった鵜飼は、芭蕉が「へおもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」と詠んだ通り、幻想的で余韻に満ちたものでした。川浪が静かに絃を叩き、鵜舟が近づいてくるのを待つ時間から、鵜飼が終わって下船するまで、豊かな時間を過ごすことが出来ました。

春の虹

小林 愛子

(名替顧問)

鳥雲に道のほとりの地藏尊
天上にありあまる日や八重桜
からくにのスープにと裂く干鰯かな
きくらげの水にふやけし目借時
ホチキスに針並びる春愁ひ
夕鴉くぐらむばかり春の虹
行く春の葉裏を返す風の音

薄暑かな

中村千久

(編集人)

葉桜の空の明るきカフェテラス
憲法記念日くずれゆく砂の城
初夏や朝の厨に鳴るケツトル
万緑に千木の金色見え隠れ
風を行くメッシュユニットの薄暑かな
郷愁はほのかに甘し桑の実も

仏生会

福島せいぎ

(顧問)

空を飛ぶものに羽あり仏生会
地を歩くものに足あり仏生会
トンネルを抜けて銀山山ざくら
渦よぎる白き帆船五月来る
囀や千木美しき一の宮
舞鶴の栄螺は青き藻をまとふ

若葉風

柳澤宗正

(顧問)

ひと葉散りまた散るひと葉竹の秋
騒がしき巢組の鴉永田町
暫くは座して上野の春惜しむ
宿の窓開くれば通る若葉風
休み明け混み合ふ医院町薄暑
まくなぎや入日まばゆき並木道

蝶の昼

中條睦子

(同人会会長)

蝶の昼肩の力を抜き呼吸
手に余る辞書や憲法記念の日
いつせいに風得て百の鯉幟
手を入れぬ太古の森や愛鳥日
指折つて計算する子昭和の日
菩提樹の花や大地に香を降らせ

暮の春

松原智津子

(北海道)

参道を相合傘や花の雨

エレベーター蜂の巣箱と乗り合はせ

送電線巡る山間鳥帰る

灯台まで靴跡点点潮干潟

晚鐘の余韻微かな暮の春

リラの雨

亀田やす子

(栃木)

コンビニへ振込みに行くリラの雨

ひともとの竹の子トタン塀押せり

三角田の畦に蔓延り蛇莓

赤土の湿りを吸うて黒揚羽

水攻めの石田堤や浦島草

灯明台

沢辺たけし

(千葉)

真直ぐに布裁つ鋏さくら冷

珈琲を啜りて黙の花疲れ

夕朧積み無蓋車の長き列

モノレール降り新緑に染まりたる

灯明台青葉を映す反射板

船橋大神宮

金蘭

吉中愛子

(東京)

染糸を縫るやうぐひす谷渡り

金蘭の花へ膝つき両手つき

盗塁子規球場に拳突き上げ夏来る

ゆるゆると夕月虹を越えにけり

病室に郵便夫来し花棟

花 胡 桃

榎 本文代

(神奈川県)

月 下 美 人

井 村 和 子

(石川)

組板に飛ばす鱗や夕桜

図書館へ長き石段花は葉に

若葉風ばらして磨く管楽器

花胡桃風あををと池渡る

通ひ来し句会上野に春惜しむ

文化会館工事のため閉館

さくらさくら

神田美穂子

(静岡県)

霞 野

前田貴美子

(沖縄)

さくらさくら父を送りし日のさくら

やはらかな雨音窓に露を剥く

正面の富士へ茶摘の目を休め

たんぽぽやまだ衰えを知らぬ足

春愁や土鳩が低く午後を鳴き

しろつめくさ疎らに密に御嶽^{ウツキ}まで

垣低く香炉小さく草霞

霞野^{ウツギ}へ御願始末の酒こぼす

清明や供花あたらしく野に傾ぐ

潮騒の夜陰かむさる放哉忌

風音散歩

(44) (七月号)

小林愛子

騷がしき巢組の鴉 永田町 柳澤宗正

「巢組」は鳥の巢の副季語、春の産卵期の抱卵や雛が巢立つまで育てる場所を作る。鴉は利口で、巢作りの時に運んだ木の枝も氣に入らないと捨て、作っているのか壊しているのか遊んでいるのか。営巢の場所で人とのトラブルも多い。

永田町と言えば皇居の南西で、国会議事堂、首相官邸等のある政治の中心。また東京メトロの駅では一番大きくカオス的な複雑構造で有名。さてさて鴉の騷ぐのも宣なるかな。

エレベーター 蜂の巣箱と乗り合はせ 松原智津子

「蜂の巣箱」とは蜜蜂の巣箱のことで、ニホンミツバチについて言えば重箱式巣箱が飼育の基本である。手に持てる位の木箱を重ね、蜜や蛹が増えたら継ぎ箱をして足してゆく。

大都会ではビルの上上での養蜂もあるというが、北海道は広い。この巣箱は所要があつてエレベーターに乗ったのである。偶然は新鮮、いま北の大地は花盛りで蜂を待っている。

金蘭の花へ膝つき両手つき 吉中愛子

「金蘭」はラン科の多年草。雑木林などに自生する。高さ30〜60センチ、4、5月ころ鮮黄色の可憐な花が穂状に咲く。

花は上を向き完全に開かない。対して白花の銀蘭がある。銀蘭は多いが金蘭は少ない。「膝つき両手つき」は草むらの中に輝く金色を、やっと見付けた喜びの姿である。

若葉風ばらして磨く管楽器 榎本文代

管楽器には、木管楽器の笛、フルート、クラリネット等と金管楽器のトランペット、ホルン、トロンボーン等がある。

「若葉風」は、すべての木々が一斉に噴出した瑞々しい新葉を渡る風、この光と風のなか「ばらして磨く」硬質の管楽器、絵になるようだ。句は8つのア音で柔らかく明るい。

潮騒の夜陰かむさる放哉忌 前田貴美子

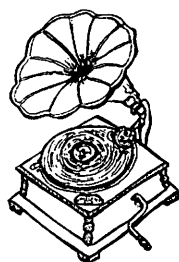
自由律俳句の尾崎放哉は明治18年1月20日〜大正15年4月7日、41歳。晩年妻子、職業を捨て放浪漂泊の末、喉頭結核のため、小豆島の西光寺内の南郷庵で死去、師系萩原井泉水。〈春の山うしろから烟が出だした〉〈入れものがない両手で受ける〉作者は全身で潮騒を感じていた、辺りは夜陰にすっぱり包まれ、その暗さが放哉の生涯をより深く感じさせている。

赤土の湿りを吸うて黒揚羽 亀田やす子

鳳蝶とも書く夏の蝶である。アゲハチョウ科アゲハ類の黒揚羽は最も大形の蝶で、羽をひろげると10センチを超える。色鮮やかな蝶が緑陰から出て、日を過つてゆく姿は美しい。雨上がりであろうか、翅に似合わず細かい口器を伸ばして水気を吸っている蝶、翅の黒と土の赤の対象が印象的である。

同人作品

江見悦子選



札幌岡本敬子

野鼠の食み跡残し木の根開く
雪折れの枝軍場の跡めけり
鷺の巢より落ちし卵の秘色めき
土手を行くひたひに枝垂柳かな
長閑しやつるりと剥けし茹で玉子

札幌林陽子

花冷や間口の狭き古本屋
辛うじて露味噌の味母の味
惜春や惑へる日々も十七歳
春寒やペットボトルの蓋固き
鳥引くや空には空の道しるべ
東雲や藻岩山は霞濃き中に

札幌濱谷和代

退職の朝の一步や春霞
そちこちの日向最初はふきのたう
初鰹づくしの土佐へ二人旅
うそといふ言葉の軽さ四月馬鹿
白樺の森の奥より初音かな

札幌 大内 和 憲

臥す人に告ぐ雪の果大声で
水替へし毬藻に春光まとひつく
心地よき春の汗して往診果つ
うららかや義齒削る音やや高目
こそばゆきものの芽の音四方より

札幌 紅 露 恵 子

料峭や肩のシヨールのさくら色
里山のふはりふくらむ芽立ちかな
田に集ひ馬頭観音祀る春
まなかひを疾風のやうに雲雀どち
清明やポプラの梢は空めざし

札幌 大内 マ キ 子

孕馬沖見ゆる眼を深うせり
春光や馬柵の噛みあと山型に
東風吹くや船名かすむ舟溜り
露味憎や地酒の味のほろ苦く
抜歯せし顔持ち帰る春時雨

札幌 中 鉢 弘 一

馬魂碑に触るる茨の芽の赤し

春深し木の根に歪む石畳
錫色に白樺映す春の沼
谷地広ぐ光の中に水芭蕉
か細くも初音こぼるる梢かな

札幌 北 浦 詩 子

敷石の隙間隙間に下萌ゆる
春の泥三和土に残る靴の跡
一瞬に澱を浚ふ雪解川
きらきらと鱗飛び散る初鯨
照り返す春日の眩しランドセル

江別 佐 藤 哲

凍解の土にかすかな陽の温み
空知野や麦千畳の金色に
青田波追ひかけて行く下校の子
下駄の緒のきつさが嬉し祭笛
廃校に残りし畑や芋の花

江別 太 田 佳 美

無骨なり句友作りし桜餅
北辛夷原始の森の目覚めなる
車椅子の母の指さすしやぼん玉

春の旅花手水愛で一万歩
はくれんの通りを闊歩空まさを

新潟 高橋 ひろ

笑ひ合ふ苦勞話や花蘇枋
犬ころの尾ほどの蔓の藤の花
桜葉降る野の親子鬼ごっこ
てふてふやきやらきやら声の女の子
金盞花いつも笑つてゐるやうな

新潟 高野 松風

切株の薄くれなるや春の雨
さざ波の代田にひかるひとところ
日照雨して湯気走りたる春の土手
風すぢを一氣にとんでしやぼん玉
ぼちやぼちやとつぶやくごとく蘆の角

益子 光岡 れい子

上州の荒ぶる風に初音かな
菜飯むすびひとつに心通ひたる
青空へ銀杏の芽吹きはじまれり
花辛夷崩れしままの登り窯
菜の花や閉ぢて久しき轆轤の場

姫辛夷空に溶け込む薄紅
芳賀 大村 かし子

春眠やぱたりと落とす新聞紙
春禽の羽を繕ふ水溜り
植込みのメインは椿八十年
咲き満つる牡丹桜の色深し

宇都宮 阿久津 勝利

口笛に鳴き声返す恋雀
竹林の撓る葉擦れや風光る
搾乳の乳房ゆたかや草青み
鐘楼の鐘の余韻や夕桜
春風に香りふくませパン工房

栃木 上岡 佳子

北窓を開く三疊山の縹色
蒼天へ命の芽吹き大櫓
珈琲待つ玻璃一面に笑ふ山
花の下ベンチに妣が居るやうな
歩を止むる夕うぐひすの声澄みて

ふぞろひの色鉛筆や春炬燵
佐野 増田 幸子

菜の花の黄にゆつくりと夕来る
山の水そそぐ竹樋の音は春
日のうすき椎の林や春遅々と
生井聖子旧宅
うららかやこぼし窯への坂のぼる

佐野 加藤 季代

点々と命つなぐや蝌蚪の紐
百畳の棚埋めつくし藤香る
山椒の芽たたき一椀香り立つ
泰山木白磁の花を掲げたり
春雷の去り弦月の空一枚

佐野 阿部 澄

温顔の作務衣の僧や朝桜
見上げたる枝垂桜の昏さかな
花櫛こけしに似たる撫仏
奪衣婆の総身白し花の冷え
自在なる黄蝶に男の子追ひつけず

佐野 芝宮留 美子

濱田邸出入りの猫や紅椿
片里の山菜萸の花まぶしめる
黒文字を手折れば春の匂ひたる

山吹や手打ち蕎麦屋の門構へ
風吹けばたちまちミモザ踊りたる

佐野 島田 和枝

地震跡は更地のままや涅槃西風
会津路の旅や名残の雪となり
ふる里の土の匂や土筆摘む
駅長の白き手袋雪解風
鶯や始発電車の軋む音

佐野 売野 緑

地に触るる源平咲きの桃の花
花吹雪小町の歌碑の小さけれ
一ひらの花びら傘に里の寺
ふらここの大き青空蹴飛ばして
菜の花やメール次次誕生日

佐野 店網 洋子

桜散る百花の寺を一巡り
美術館出て本降りの花の雨
昼の月見上ぐる花の三分咲き
畦塗や鶯の親子の足の跡
玄関に燕が先に入りけり

足利 大 木 茂

素通りを横目に見遣り苗木売
ちよつとこい氏神の屋根剝がされて
蟾出づる抑留兵の屋敷墓地
鶺鴒深き棚田に雉子脅し合ふ
雨意迫るもつてのほかの菊根分

土浦 澤 照 枝

果樹園の隅のピザ窯花りんご
吹き荒れの浮棧橋に柳絮舞ふ
畑鋤きの朝の雨に加波山烟る
歙ひとつ鏡のごとく畦を塗る
空港へ一本道やりラの花

加須 茂 木 弘 子

辛夷咲く閉ざせしままの登り窯
春の泥小犬を胸に跨ぎけり
高木のしかと抱ける鴉の巢
束の間や夜桜照らす一輛車
かすかなる風を捉へり花楓

さいたま 山 本 右 近

蝌蚪かぞいまだに音譜読めぬまま

十摘んでよろこび十の露の盞
ぎりぎりのところに轍すみれ草
しりとりのやうに欠伸をうらけし
海の道辿り海市に古代都市
春宵や障子の穴にある秘密
所沢 三 好 か ほ る

武甲嶺に鶺鴒かかり初む花の雨
巢燕や山の駅舎の太梁に
ボール蹴るサッカー少年風光る
草青む園に塗りたて滑り台
旅苞の刈安染の春シヨール
所沢 南 雲 秀 子

花吹雪浴びてほほばる握り飯
城跡に小さな祠柿若葉
はるかまで菜の花盛る荒川土手
巡り来るパークトレイン花木
姫辛夷の並木抜け来るランドセル
千葉 田 中 道 江

春光に漆光りの柱かな
庄川は碧満々雪解水

梅咲ける氷見は静かな昼下り
山笑ふ裾の棚田に水光る
囀や誰も滑らぬ滑り台

千葉 松浦 陵 保

満身に喜び溢れ黄水仙
風光るペダル漕ぐ足軽やかに
鮮やかな海と菜の花安房の国
木瓜の花大庭石に寄り添うて
ひこばえの一寸二寸の健気さよ

千葉 喜多恭 仁子

甘党の夫へ供ふる桜餅
春宵や素踊り凜と玉三郎
半時を縁側に座す目借時
花満開本物なのかこの平和
赤飯のおにぎり二つ飛花落花

千葉 大月 玲子

春光の小さき窓閉ぢ退院す
病院を出で翻す春シヨール
豚汁をぐつぐつ煮たり花の冷え
飛花落花追ふ子の肩に手の平に

行く春や釣糸の綺羅湖の綺羅

佐倉 大内 佐奈枝

散る桜ひとひらづつを水の上
水かげらふ躍る橋うら花見船
能面の舞の一差し花の冷え
花蘇枋木肌あまさず咲き満てり
筍の縦割りにして売られをり

佐倉 三 屋 英 俊

はんなりと月に枝垂るる桜かな
しやばん玉歪み整へつつ空へ
手際よき爺や鰯の出刃捌き
瑠璃色に浮かぶ地球やしやばん玉
傾いて回る地球や春愁

佐倉 横川 良子

先頭の見えぬ行列山笑ふ
峠越えバックミラーに春の雲
行先は風が誘ふ花筏
雑踏を避けて路地裏猫の恋
老木の精一杯の花の房

四街道 奥 太 雅

戸袋を奪ふ巢鳥のかまびすし
八十の坂は難儀や鳥曇
沢水の中に葉先や水草生ふ
いつまでも道路予定地花なづな
交差点に旋毛^{つむじ}となれり花の塵

四街道 塗 木 翠 雲

建て付けの悪き雨戸や春嵐
法話聴く良太師眠る彼岸寺
ただ生きてゐるだけで良し桃の花
鉄の柄に楔打ち込み耕せり
御座船を見送る利根や諸葛菜

船橋 山下 良 江

小糠雨花こんもりと地藏堂
水ぬるむ広場の木々の枝を張り
青空を指して桜の背伸びする
ぶつかつて犬駆けてゆく花の下
過りたる電車の客も花見上ぐ

船橋 久保村 淑 子

城下町石割桜咲きほこる

常陸野や水田の奥の花辛夷
菜の花の囲みし淵や魚はぬる
花曇どつと落ちたる牛の糞
庭先の藤を覗き見してをりぬ

船橋 片 桐 帆 一

古草や雨にとびとび赤味差す
きらきらと日照雨の通る竹の秋
向き変ふる水上バスに花の屑
桐の幹四月の雨に輝けり
春の雷到着遅れの便を待つ

船橋 宮本 加 津 代

花冷や仰ぎて星の明らかに
粧ひの少女の匂ふ街薄暑
年よりも少し派手目に更衣
身辺の整理もつかず花は葉に
よき花の咲くを願ひて菊根分

船橋 中 嶋 久 登

百日の旅の荷解く四月馬鹿
大手門堀にさ揺らぐ柳影
花屑や風の道筋残りたる

下船後の揺れ懐かしや花筏
御座船の賑はひ運ぶ春の利根

柏 山本とく江

宝前に宝珠解きたる白牡丹
花冷や小さき仏壇灯したり
花筏割りて釣舟漕ぎ出せり
納骨の供華をしたたる花の雨
裏返る花卉白し紫木蓮

柏 内田郁代

鳥風や友の戒名音読し
清明や母の形見の翡翠玉
城趾の木々のふくらむ春の雨
蟻の道からまつてゐるピオトープ
家毀つ跡を埋めたる諸葛菜

柏 古川京子

復興の天守の威風桜東風
春うらら頭にたまふ花灯籠
噴煙のほどけし空や春の青
草千里わき立つやうに揚雲雀
春満月崖に真白きマリア像

流山 穂刈照子

しなやかに水押し戻す蝌蚪の紐
糸桜空の重さを受け止めて
ハーレーを停めて漢の花見かな
浮き上がる風のひと叢雪柳
日だまりに冷めてゆきけり落椿

市川 奥澤よし江

春や春体幹を決め息を吐く
惚けたる吾が身を走る春の雷
つんつんと石段登る紋黄蝶
清明や息する土に素足置く
筍を掘り上げし手に竹の風

東京 名和政代

花三分上野のくじら尾をたれて
鳥雲に子規球場を旋回す
手賀沼の雑木林に雉子の声
手ぬぐひを借りて体操新社員
運針を扱く指先昭和の日

東京 藤田裕子

俄雨つかのまここにも花筏

花疲ことば少なに鮭茶漬
炊き過ぎし筍飯は子に持たせ
み仏の裳裾に甘茶灌ぎけり
膝に散る大福の粉春の昼

東京 加賀 葉子

庭からの鶯の声佳き日なる
花吹雪両手を上げて子の跳ぬる
ぬつと伸び今朝赤々とアマリリス
盆栽の青き実梅のころがりぬ
葉の縁に光る二粒揚羽の卵

東京 久留島 規子

界限にのこる仕舞屋木の芽風
天井の双龍睨む花の寺
橋いくつ潜りて花の隅田川
老酒の甕は野ざらし花曇
学舎の桜吹雪にまみれたり

東京 岡村 純子

ふらここやセピア色なる母のこゑ
木の芽どき厨の窓の明るくて
藤棚の香を解き放ち風渡る

傘広げ枝垂桜の真つ盛り
せせらぎを帯なしてゆく花筏

東京 三村 紀子

地を覆ふ猛々しさも杉葉かな
原色の小山となりて花つつじ
陽光に大むらさきを透かし見る
斑入り葉に雨粒のせて花擬宝珠
腕まくりして皮むいて夏蜜柑

東京 小池 清晴

房総の春独り占め無人駅
食卓にバッハの調べヒヤシンス
鈴懸の無骨な幹や風光る
靴音に鯉の口開く花曇
花見船追うて飛び交ふ鷗かな

東京 一由 久美子

描きかけの梵字のやうな蟻の道
丁寧にさばく鱧の身の透けて
春宵やしづかな雨の天守閣
練切の花や八十八夜来る
つややかな緑の瓦花水木

武蔵野

砂 地 宏 子

山国の桃の花咲く一二輪
八重桜風を染めつつ散りゆけり
山裾へ雪崩れ煌めく躑躅かな
野遊の友軽やかやシヨートボブ
退院の知らせ漸く夏近し

武蔵山

松 井 宣 夫

隧道を抜くれば秩父花の雨
指先に香りを残し桜餅
少女らの終はらぬ会話春の宵
畑打つやフェンスの向かう爆撃機
夏近しタンクトップの力瘤

町田

広 瀬 俊 雄

湧水の音の流るる代田かな
靴を手に三ツ石渡る春の波
風吹けば落花流るる恩田川
囀や鍬をかつぎて畔を行く
金蘭の咲き雑木山明るめり

町田

桔 梗

純

人気なき校庭の朝花吹雪

紋白蝶中州の小さき花々へ
屋敷神の背に楓の芽吹きかな
里山の中腹盛りの山桜
囀や幼の列の黄色帽

日野

喜多尾 明子

花びらの路上にオートバイを停め
菜種梅雨土鍋の粥の吹きこぼれ
げんげ田やひとり降ろしてバスに行く
八重桜の一枝を賜ふ誕生日
虚と実となひませの世ぞ亀の鳴く

横浜

西 本 才 子

白木蓮一片とんで暮れにけり
丹の橋へ休みなく散る花吹雪
花筵大きく拡げ子等ゲーム
店先に物種ならべ金物屋
寺裏に廻れば土手に一輪草

横浜

田 賀 煤 恵

柿若葉窓いつぱいに枝ひろぐ
小手毬の枝より溢れ咲きにけり
青芝へ猫の来てゐる朝かな

夏萩や旧仮名文字の道しるべ
わが庭を明るくしたり花ゆすら

横浜 三木 豊子

石鹼玉ひしやげしままに虹色に

竹林の大きく撓ひ椿落つ
花冷や片脚の驚身じろがず
太極拳脚蹴り上ぐる花の下
米寿祝朱の膳に乗る桜鯛

横浜 星野 信子

ふらここをぐんと漕ぐ子の無重力

おほろ夜や猫の去り行く曲り角
野仏の額に乾く春の泥
自販機のごとごとがたん鳥帰る
福耳の翁の燥ぐ花見酒

川崎 新妻 奎子

信号を待つバスの窓初桜

ロッカーを空っぽにして三月尽
門口の藤の香帯びて夫帰る
白山吹便り途絶えし友のあり
たんぽぽの絮空へ飛ぶ通院日

川崎 大久保 進

地虫出づスクランブルの交差点

高層の開かずの窓や鳥帰る

節太き指に黒文字桜餅

新社員乗り込む車内どつとこむ

子は親に孫は子に似て花は葉に

鎌倉 恒川 清爾

仏生会何も語らぬ父なりき

春の雪じゆくじゆくじゆくとジャム煮つめ

大仏の背に大窓花吹雪

鳥帰るピエロ一人の大道芸

アルバムに青春の吾春の虹

伊勢原 佐藤 和子

春雷のたつた一つに雨上がる

護摩を焚く煙の中の御開帳

人絶えて虻の翅音の花御堂

囀やいつも開かずの蔵の窓

うらうらと春日にまみれもやひ舟

静岡 大村 峰子

一粒の雨に頷く花莖

芝青む縄文土器の出でし丘
紙包み解くや溢るる桃の花
山葵田の声青空へ飴して
湖岸まで雀隠れの径続く

静岡 宮崎 知恵美

菩提寺の赤きまんさくひげ伸ばす
探梅や上弦の月連れ帰る
蛤の砂出し一夜寝かせたり
犬ふぐり踏まないやうにポストまで
ものの芽の尖りはすべて天に向き

静岡 望月 敏男

我が影に入りては出でて初蝶来
風が風誘ひて揺るる山桜
探り歙雪割草に触れゐたり
立春の影の相寄る松と松
水琴窟ぼつりと春を語り出す
材木町水道町へ春一番
出番待つ子猿のむしる春の芝
菊根分土竜の穴に石を詰め

静岡 藤原 千代子

一人静音なき雨に咲き揃ふ
神苑の波のきらめき残る鴨

静岡 荻野 加壽子

朝ざくら寝癖を直す古鏡
紙コップに熱きコーヒー花疲れ
鳥ぐもり遠くて近きいくさの火
果てし無き空たんぼの絮の旅
アスファルトにはつかない起伏花の雨

静岡 小川 明美

天城嶺に帯なしてをり春の雲
白子舟白波立てて戻りくる
羽衣の松にひこばえ波の音
使はれぬ宮の土俵へ雀の子
掌に掬ふや芹の水匂ふ

静岡 藤本 節子

花あせび川の高鳴る一処
春菜畑ひと日恵みの雨となり
山菜莢や蔵店で買ふ香の物
野遊や代り代りに丸木橋
檻揺らし威嚇の猿や山笑ふ

静岡 大長 文 昭

麒麟舎の前の掘割水草生ふ
木の楔鉄の楔や農具市
まんさくや遠富士裾をゆるやかに
花万朶下を園児の縄電車
鈍行の淡海の旅や目借り時

静岡 加山 ひ さ 子

背伸びして内緒話や花ミモザ
吾が肺の写真くつきり花の冷え
一山に沁み渡りたる雉の声
抽斗に妣の実印花の冷え
春の海振り向きざまにきららなす

静岡 石 川 裕 子

退院の夫に選ぶや春セーター
囀や初登校のランドセル
ねえちゃんの言ふこと大事入学児
のどけしや丸まつて猫軒かき
夜の更けて煮詰むる苺コンポート

静岡 本 多 ひ と み

本殿の奥に揺れをり春の燭

香を放つ背丈揃はぬフリージア
春霞富士山頂はあの辺り
車座の肩を寄せ合ひ花見酒
どの子にも眼に力入学す

静岡 杉 澤

修

まづ一献備前の鉢の木の芽和へ
明けやらぬ街に真珠の灯のおぼろ
追伸のインクの滲み鳥雲に
夕空は鬱金の翳り街黄砂
清明や羽搏くもののみな眩し

静岡 松 永 博 子

水口のこぼこぼ鳴るや蝶の昼
踏青やドーム輝く天文台
蠶や舌にころがす薄荷飴
初蝶来白き光を纏ひて来
AIと尻取りしたる万愚節

射水 成瀬 真 紀 子

忌を修す音無き雨のお中日
旧制高校跡の大樹や囀れる
光縫ひ自ら光り燕来る

春疾風チンドンマンの列乱す
蜃気楼海盛り上がり鰐となり

金沢 今越みち子

帯締めて純子師囲む春の夢

旅三日われに付き添ふ春の富士
舞殿の風に舞ひたる落花かな
溶岩を踏み火口をのぞく春日傘
橋立を見て足早の通路かな

金沢 伊藤美音子

入り船や千の苞脱ぐ猫柳

雪解靄立ちて入らずの杜萌黄
赤きもの浮きては沈む雪解川
弾けあふ雀のこゑや軒の春
日脚伸ぶ己が影連れ米買ひに

金沢 高田たみ子

齒の半分欠けし古獅子冴返る

春菜摘む眉のあたりに朝の風
蛇くはへ鳶舞ひ上がる真昼かな
愛犬と抜くる人込み花疲
橋裏の古巢賑はふつばくらめ

金沢 豊田高子

やはらかに春の雨吸ふ野山かな
おてんばの帯をきりと智恵詣
夜桜や池の底ひに白極め
欠け仏雀の帷子纏ひけり
つばくらや検番の軒水匂ふ

金沢 松井佐枝子

雛椿挿す式台や一笑塚
一天へ千年櫻芽吹き初む
可惜夜の帷に泛ぶ桜かな
智恵詣多羅葉に書く願ひ事
木橋来る芸妓小走り花の夕

金沢 石川純子

夕映えの桜の妖し去り難し
図書館の移植の桜咲きほこる

沈黙の待合室や春寒き
目薬の一滴しむる花の冷え
春禽の羽ばたき微か風残し

金沢 河野尚子

中東の戦禍に憂ふ花の冷え

しなやかに猫の溶けゆく春の闇
対岸の子の声届く木の芽晴
花日和巨船に湾の賑はへり
小流れのひかる水底水芭蕉

金沢 道場 啓子

両脇にサッカーボール木の芽風
野梅咲き静もり返る土俵跡
草原の巣箱低きに穴小さし
若き等の早口を浴ぶ紫木蓮
街路樹の裾灯りたり春夕べ

金沢 杉本 年虹

海老の子も蛸の子もゐて白子干
禿^{かぶろかみ}髪梳りては雛納
隠れなき夫の所在や花粉症
夜桜や券売機より京ことば
花散らふ城石垣の符号かな

金沢 南 恵子

合格の子の素つ気なき返事かな
裏木戸を開くれば川や花あんず
朝燕の行き交ひ繁き三味線屋

田の神の在すあたりか初蛙
山笑ふヨガの体の弓なりに

金沢 松下 信子

露のたう香る夕餉の安らけし
囀や墓前に一人黙のまま
花冷や遠なる海の鉛色
はくれんの夕づきてなほ白極む
住み馴れし郷様変り竹の秋
行く春の一筆書の達磨かな

金沢 北川 禮子

涅槃会の太鼓響けり純子句碑
湯の街のからくり時計山笑ふ
ぼた餅の餡を煮あぐる春の昼
忌を修し話の尽きぬ春夜かな
とどまらぬイランの戦火花の冷え

金沢 清水 英理子

オカリナの三重奏や水温む
自転車で巡る一村山笑ふ
地図持たぬ予定なき旅木の芽風
ひとひらと銘打つ和菓子桜時

争ひの無き世かなはぬ花は葉に

金沢 松田 好子

糸桜更地の寺に堂崩れ
せせらぎの春日きらきら稚魚群るる
鶯や読経流るる放生池
春暁のまぶた鉛となりて夢裡
朝一番能登のたらの芽届きたり

金沢 井端 久子

笑ひごゑ溢るる鍛冶屋麦青む
宿坊の湯屋に一輪花椿
花満ちて賛美歌洩るる日曜日
永き日の貨車過る音夕茜
初蝶へ野中の細き流れかな

七尾 谷渡 末枝

濃淡の芽吹きも能登の奥処かな
やれ可笑し躍り食ひてふ螢烏賊
耕耘機大曲りして泥まみれ
味噌汁も筍飯も嫁の味
厩出し非番の獣医子を連れて

白山 加藤美栄子

高嶺晴喜び放つごと桜
春がすみ立山連峰浮き上がる
流しギター洩るる裏町灯おほろ
婚の荷に華やぎ添ふる百千鳥
花菜づけ朱塗の膳の真ん中に

敦賀 倉谷 ます美

涅槃西風「四高桜」の碑を撫づる
潮まねき砂の穴出でランデブー
雪解風草木めざめの香りたつ
春眠の中に浮く身へ夫の声
小白鳥引きし静けさ内の湖

敦賀 鶴田 勝子

皺の手に稚児より受くる雛あられ
少女らの薄紅を引く花のころ
花時や宿の大玻璃磨かれて
耕の後を離れず鷺一羽
糠雨に万朶の花の香り立つ

敦賀 中川 雅月

少年と雪解野走る犬二匹

孕鹿長き睫毛の物憂げに
枕辺に歎異抄あり涅槃西風
潮招の缺上下や夕間暮れ
声高のツアーガイドや花万朶

敦賀 中 村

優

縦横に城下町行く春日傘
花換や蒔蓄垂るる旅の人
桜時野見宿禰の土俵入り
春眠や妻の寝言が聞き取れぬ
蜥蜴出づ世界遺産の銀の洞

敦賀 為永香月枝

風光る鳩は胸より歩を始め
春眠や柱時計の音遠く
果てしなく続く数式日脚伸ぶ
梅散るや旧き家並の川灯籠
良き事の始まる予感山笑ふ

徳島 福島 吉 美

冬苺求肥に包み老舗守る
古民家の庭木に吊るす雛揺るる
花菜活けまぐち二間の煎餅屋

涸川の底に水音ごろた石
船隠し残る瀬戸内目刺干す

徳島 村上 和 義

花菜風窓全開の路線バス
教会の十字架目差し初燕
桜散る小便小僧弓なりに
泥煙あげて恋するむつごらう
日時計を囲むたんぽぽ暮れなづむ

徳島 宮 西 修 一

捨て置きし鉢にももの芽育ちをり
苗床の土の匂ひと日の匂ひ
ほつほつと棘の間に山椒の芽
留守電へ相槌返す四月馬鹿
花の雨傘の混み合ふ吉野山

徳島 平 岡 功

水温む潮入り川を走る稚魚
春雷の一閃眉山影絵めく
咲き満ちて風になだるる雪柳
雨粒に瑠璃色極む犬ふぐり
ままごとや皿もお菓子も春の泥

石井 木内 マヤ

朧影西の山より降りてきし
黄身餡をちよんちよん牡丹の花の蕊
酒飲まぬ父も好物木の芽和へ
水面までつくかつかぬか老桜
菠薐草まん中にして卵焼き

小松島 岡田 あゆみ

折り上げて凭れ合はせる内裏雛
小さき手のくぼみにふたつ雛あられ
小綬鶏に声掛けらるる宮の裏
足元に土筆の伸ぶる武家屋敷
あたたかやペンギンの子の急ぎ足

松山 入河 大河

連翹を中心に据ゑ活花展
床の間に櫛の花の匂ふなり
マネキンを手本に試着春シヨール
葉の陰に苺の花の小さくて
春分の日鳥の鳴き声聞き分くる

福岡 宮田 千恵子

二分咲きといへど楽しき桜かな

うららけしビルを映してビルの窓
指揮棒の先であやつる春の風
春耕や風の匂ひと日の匂ひ
フランスの石鹼つかふ花疲

長崎 丸本 祥夫

跳躍し求愛の舞ひ鯉五郎
陣屋址石段沿ひのつくしんぼ
花鳥賊を横一列に繋ぎ干し
解体の寺の瓦へ黄砂降る
組板に赤貝びしと叩きけり
水車よりほとばしりたるつばくらめ

西海 山下 敦子

潮待ちの船を舫ふや春大潮
小綬鶏のにはかに啼けり山閑か
入り彼岸此岸のいくさ終はりなく
のどけしや空海に溶け島は浮き
おほるなる湯殿の桶の触るる音

宮崎 中山 宣

バス待てば虚空に響く初雲雀
豌豆の初物並ぶレジの横

翁草^{木喰山}びつたり寄り添ふ岬馬
腕半分欠けし如来や里若葉
雨しぶき霞隠れに街消ゆる

宮崎 中山 芳 教

木の芽晴朝戸風受け日差し待つ
まなかひに尾鈴なだらか弥生尽
建国祭社殿の剣舞静寂切る
空き多き梅咲く団地小糠雨
新築の影の長さや春遅き

宮崎 鳥 居 達 史

初音して山家の里の水うまし
禅寺の朝の読経や竹の秋
のど館を噛む音籠る春の風邪
剪定の鉄なまくら蔓絡む
園児らの声援黄色夏来る

那覇 中 本 清

春の夢さめて一病残りけり
春愁や胸のボタンを掛け違ひ
春禽を数へる間の昼深し
風水のよろしき墓や清明祭

磯草を引けば乳噴く春の果

那覇 辺野喜宝来

風光る蟹の軒端の干し蓆
てふてふの影屏風へ触れゆけり
うりずんや豆腐売来て路地濡らす
春興や山羊の甘鳴き猿の尿
眼前に河馬の尻あり春の蠅

西原 宮 城 勉

明日のため酒を慎む四月馬鹿
震へつつ子ら祓はるる海開き
腰痛みの気鬱の窓辺菜種梅雨
清明の銀葉の海雨上がる
後ろからうりずん南風の纏ひつき

PFASの汚染の水や蝌蚪太る
※PFAS……有機フッ素化合物・基地流出の疑い
島見城 渡 眞 利 眞 澄

もんしろ蝶の群れを分け来る御願人
香煙の御嶽^{ウタキ}に満てりうりずん南風
御穂^{ミフイダ}田の青田二尺に海の風
春昼や太き音する牛の尿
藍壺を攪拌の音うらけし

ベルン 鈴木 波江

蒲公英の土手道長し昼の月
春コート翻し来る男前
川べりのマルクス像に春の塵
一箱の手紙に座り日永かな
久々の写経の窓や鳥の恋

〈お詫びと訂正〉

5月号10ページ上段4行目に誤りがありました。
お詫びして訂正します。

(誤) 鏡の間に向かうとしている。
(正) 本舞台に向かうとしている。

5月号40ページの文中に誤りがありました。
お詫びして訂正します。

(誤) 長兄で「万象」創刊主宰であった瀧澤伊代次氏
(正) 次兄で「万象」創刊主宰であった瀧澤伊代次氏

俳句

7月号
予告

6月25日発売
予価1,300円(本体1,182円)⑩

巻頭作品50句「三村純也」

作品21句「横澤放川・井上弘美」

おしやれな句

大 特 集

- 総論 俳句と装い
- 衣料品の句——春・夏／秋・冬
- 衣料雑貨の句——春・夏／秋・冬
- 靴・帽子・鞆 ●季節ではない服飾品の句
- 番外編 おしやれな人を描いた句

第60回 蛇笏賞 受賞第一作21句……大木あまり

角川俳句賞作家の四季⑩15句……千野千佳

追悼 岩淵喜代子

新連載

幾星霜の扉

近代俳人の肖像

……岩井英雅

※内容は要覧になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

同人作品の佳句

江見悦子選

鳥引くや空には空の道しるべ
 そちこちの日向最初はふきのたう
 風すぢを一氣にとんでしやほん玉
 素通りを横目に見遣り苗木売
 しりとりをやうに欠伸をうらけし
 傾いて回る地球や春愁
 日だまりに冷めてゆきけり落椿
 虚と実のなひまぜの世ぞ亀の鳴く
 高層の開かずの窓や鳥帰る
 出番待つ子猿のむしる春の芝
 光縫ひ自ら光り燕来る
 行く春の一筆書きの達磨かな
 水車よりほとばしりたるつばくらめ
 春興や山羊の甘鳴き猿の尿
 清明の銀葉の海雨上がる

林陽子
 濱谷和代
 高野松風
 大木茂
 山本右近
 三屋英俊
 穂苅照子
 喜多尾明子
 大久保進
 藤原千代子
 成瀬真紀子
 松下信子
 丸本祥夫
 辺野喜宝来
 宮城勉

中本
瀧

術後三日目には脳トレが始まった。言葉の理解や発

俳句では、右脳で景色や光景を想像し、左脳で森羅万象を五七五に込めると言われる。幸いにも後遺症はなく、新たな俳句生活を楽しんでいる。

8 サキソホン光る新樹のジャズ通り 加藤美栄子（白山）

8 サキソホン光る新樹のジャズ通り 加藤美栄子（白山）

7 正面の富士へ茶摘の目を休め 神田美穂子（静岡）

7 万緑や赤子は鬼の顔で泣き 喜多尾明子（日野）

7 ねむりつつ乳すふ稚児や聖五月三屋
英俊(佐倉)

7 里は水音ばかり田水張る
村上和義(徳島)

重みをつたへて出る。ちやまし玉 中條 達子（金沢）

⑥ 孟み(三ノ)ロを出るしやに人王 中偏 賤子(金沙)

5 机上の蟻わねに逃す日殺める日 喜多尾明子（日野）

5 大なる空の引力松の芯穂刈 照子（流山）

5 産声を待つ間緑雨のガラス窓 谷渡 末枝（七尾）

5 一郷を一色に染む桃の花 平岡 功(徳島)

5 アルバムの君らの若さ春惜しむ 江見悦子（東京）

やらかな雨音窓に落を刻く 坤田美穂子（静岡）

はつしや志村喬の居り方な
灰予川等子（争闘）

ふゆんこや志村喬の居りさな
表野力葎子（静岡）

4 たんのほの花は太陽祭は月穂刈 照子（流山）

3 江戸絵図の海に波立つ立夏かな 一由久美子（東京）

3 囀の一樹一樹の音色かな 谷渡 末枝（七尾）

3 夏めくや余生なかなか面白し 桑原優美子（東京）

3 とび来り翅おさまらず天道虫 山下敦子（西海）

3 菑敷色に暮れゆく空や花は葉こ 左藤 和子 (尹勢直)

我々の蓋の香りに、藤原愛美子（東京）

3 裁つ布の盛の香りで薄暑かな 桑原俊美子（東京）

3 砂時計砂の落ちきる部屋薄暑 山本 右近（さいなみ）

3 騒がしき巢組の鴉永田町柳澤宗正（横浜）

(＊句頭の数字は点数を示しています)

俳句カレンダー掲載句自註

令和8年版俳人協会『俳句カレンダー』に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたします。

昨日とはちがふ風吹く晩夏かな (7月) 中村千久

令和元年(2019)秋の句。句集『薄荷飴』第9章「夢の神」に収めたものである。句集刊行の際に序文をお願いした故内海良太主宰(当時)が「序にかえて」の中で、

風の中檻樓ぶら下げて蓮の骨

あげはてふ風乗りかへて乗りかへて

月の出の浜木綿に風立ちにけり

坪庭に坪庭ほどの秋の風

はればれと冬の噴水吹かれをり

風の研ぐ寒三日月を見てをりぬ

を取り上げて、時候、天文、地理の三つの歳時記に詩因を求めることが多い拙句の中でも、とりわけ「風」にかかわる句が多いと指摘された。殊更に意識していたわけでもないのだけれど、そうした傾向があることは確かかなようだ。

表題句は、夏の終りに恒例の家族旅行をした折にふと感じた「風」であった。『古今集』秋の部巻頭にある藤原敏行のあの「風の音にぞおどろかれぬる」と同じ方向から吹いて来た風であった。

前年の夏に亡くなった妻の姿はこの家族旅行にはなかったから、そんな感傷が上五中七の表現になったかもしれない。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に土偏の付く漢字を入れましょう。

- 1 よく見れば薺花咲く□根かな 松尾芭蕉
- 2 鮒ずしや彦根の□に雲かゝる 与謝蕪村
- 3 三井寺は三千□の若葉哉 正岡子規
- 4 ちら／＼と陽炎立ちぬ猫の□ 夏目漱石
- 5 切支丹□を下り来る寒さ哉 芥川龍之介
- 6 はこべらや焦□の色の雀ども 石田波郷
- 7 校□に鳩多き日や卒業す 中村草田男
- 8 □田に百日筋目つけ通し 沢木欣一
- 9 青梅を洗ひあげたり何の安□ 細見綾子
- 10 時雨来て□の匂ひも氷上郡 内海良太
- 11 □の冷えを吸ひ上げて咲く桜かな 飛高隆夫
- 12 □輪の目色なき風を通しけり 工藤弘子

【正解】

- | | | | |
|----|---|---|---|
| 9 | 5 | 1 | 垣 |
| 堵 | 坂 | 2 | 城 |
| 10 | 6 | 3 | 坊 |
| 土 | 土 | 7 | 塔 |
| 11 | 7 | 4 | 塚 |
| 地 | 塔 | 8 | 塩 |
| 12 | 8 | | |
| 埴 | 塩 | | |

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（五月号）

沢辺たけし

耳鳴りも我が身の一部 春隣 林 陽子

「耳鳴り」は気にすれば気にするほど鬱陶しくつらいものだが、ものは考え様だ。〈我が物と思えば軽し笠の雪〉という句があるように、作者も「吾が身の一部」と思うようにしたことで、気持が少し楽になったのだろう。「春隣」という季語を使ったことによりそれが分かるのだが、これも季語の力と言える。

余談だが〈我が物と……〉の原句と言われるのは宝井其角の〈我が雪とおもへばかろし笠の上〉である。

一車線占領したり雪の壁 落合 裕子

作者は札幌にお住まいだが、この冬の雪は殊更凄かったようだ。この句、「一車線占領したり」というフレーズで、は何だろうと思ったところに「雪の壁」という具体的なものが出てきて、その景が鮮明になった。十七音で雪の大変さを全て表現することはできないが、一つの情景を切り取ること、読み手はその大変さに思いを馳せることができる。

凍て坂の一步に迷ひ遠回り 太田 佳美

この句の「凍て坂」は上り坂か、下り坂か、どちらでもよいのだが、より危ないのは下り坂かもしれない。作者は最初の「一步」を踏み出す時に危険を感じ、それを「迷ひ」と表

現したのだろう。「凍て坂」を行くのはあきらめ、「遠回り」をした。この句の「迷ひ」の中にはご自分の体調や年齢、更には天候も加味されていると思われるが、急がば回れという言葉もあり賢明な判断である。

薄氷を踏む硝子ほど恐れずに 高橋 ひろ

登校する子が薄氷を踏んで行く句はよくあるが、この句は作者が意識して「薄氷を踏む」瞬間を詠んでいるのが面白い。「薄氷を踏む」一瞬前に、「硝子」を踏んで割れた時の、あのいやな足の感触を作者は思い起こしたのだろう。最後の「恐れずに」という言葉により、この句は生きた。薄氷を踏んだ時の軽い感触が読み手にも残る。

梅三分俳句のたまご身の内に 光岡 れい子

三分咲きの梅を見て心がちよつと動いたのだろう。その感動を「俳句のたまご」と言ったのが作者の手柄。自分の感動をどうやって俳句に作り上げていくか。ある意味、俳人の一番楽しく、また一番やっかいな作業である。「身の内」に宿った「たまご」は暖めて立派な句に育てていつてもらいたい。

鯉きらりゆらり八嶋に春立てり 加藤 季代

「八嶋」と言えば下野国の歌枕となっている「室の八嶋」、芭蕉翁が〈糸遊に結つきたる煙哉〉と詠んだところである。現在の八嶋にも池に八つの島があるそう。

この句「きらり」「ゆらり」「立てり」がリズムを作り、且つ句を作っている。しかし、「きらり」と「立てり」の対象は解るが、「ゆらり」がよく解らない。八嶋に掛けた「糸遊」のゆらりか、歌枕にちなむ「けぶり」のゆらりか、「鯉」

のゆらりか、それとも意味はなく、単に調子を取るための「ゆらり」かもしれない。いずれにしても面白い句である。

逃水を追うてよはひを重ね来し 山本右近

「逃水」、広辞苑には「蜃気楼の一種。舗装道路や草原などで遠くに水があるように見え、近づくと逃げてしまう現象」とある。若い時は目的や目標を持ち、それに向かって行動をしていく。叶えば次の目的、目標となり、叶わなければ目標を変え、そうやって成長をして行く人もいる。そして年老いて振り返れば、若い時のことは夢のようであり、且つこの句のような感慨を持つというのは自然であり、共感できる。

春昼や時計を出づる小人たち 宮本加津代

昼の12時になると人形が踊りながら出てくる絡繰時計を見たことがあるが、作者も同じようなものを見たのかもしれない。この句の「小人たち」をさほど抵抗なく受け入れられるのは季語「春昼」の力である。俳句は季語の選択で、このような面白い句にもなるが、平凡な句にもなる。

配らるる紙音迫り受験生 桑原優美子

これから筆記試験が始まる受験会場の様子を詠んでいるのだが、会場内の捉え方が面白く「配らるる紙音迫り」には臨場感と「受験生」の緊張感さえも伝わってくる。

羽ばたけるものの影ゆく春障子 一由久美子

冬の間は障子に鳥の姿など映らなかつたのだらう。季節が移り春になったら庭木に小鳥が来るようになり、その飛ぶ姿が障子へ映るようになった。この句、「春障子」だからこそ「羽ばたけるものの影」が生きた。

一村を冬満月の照らしたり 宮崎智恵美

俳句で一番使われる数字は一である。この句も「一村」という言葉を使っているが、効果を發揮している。句を読んで直ぐ浮かんだのが、蕪村の「月天心貧しき町を通りけり」である。景が似ているということもあるが、どちらも肩を寄せ合って生きる人間の姿が背後にあり、耿々とした月の美しさが句を作っている。

願願をひびかせセロリひとりの餉 荻野加壽子

「セロリ」は冬の季語。シャキシャキとした歯触りで、独特の強い香りを持っているため、好き嫌いの分かれる野菜である。「願願をひびかせ」と言う面白い表現から、味わって食べていることが伝わってくるのだが、これは静かな「ひとりの餉」だからこそ気づいたことなのでは。

開かぬ戸にますます怒る雪女郎 今越みち子

「雪女郎」はみちのくや北陸の雪深いところでの伝説であり、禍をもたらすものと言われている。家の戸が鳴るのは吹雪によるものだが、「雪女郎」が戸を叩いているのでは、そう思ったら開けるわけにはいかない。叩いても叩いても「開かぬ戸」に「雪女郎」はますます怒り激しく叩く。そんな吹雪の激しい夜に出来た北陸の作者なればこそこの句。

転ぶなと言ひしが転ぶ霜の朝 宮田千恵子

「転ぶな」と言った相手は子供か、ご主人か、それとも自分自身にか、誰でもよいのだが、注意した矢先なのに転んでしまった「霜の朝」。霜が溶け始めて滑りやすくなっていたのだらう。リズムがよく滑稽味のある句。

喜望峰

広瀬俊雄

独房にバケツ一つや空青し
囚人の石切場跡夏の夕
マンデラの植ゑし葡萄の芽吹きたる
風涼しワイン倉庫の鼠取り
烈日や種まで透くる青葡萄
断崖に秋の花咲くロープウェー
夕風の浜を蹴りたる駝鳥かな
螢とぶケープタウンの街灯り
岩頭に絶えず碎くる夏の波
東西に夏濤分かつ喜望峰



2011年、私はアフリカの喜望峰を訪れた。そこは1488年ポルトガル人ディアスが発見し、「嵐の岬」と命名した所である。後にポルトガル王ジョアンⅡ世が「希望の岬」と改名した。日本ではいつからか「喜望峰」と呼ばれている。岬の西側は大西洋で東側はインド洋だという。両洋の波濤が激しくぶつかりあう様は凄まじい迫力であった。それを見ながら、私は二度と来られないであろうこの場所を後にした。

桜の頃

木内マヤきのうち

セスナ機の切り込んでゆく春の空
仏生会たぎる大釜甘茶の香
夕桜妖精たちの集まり来
夜桜やティンカーベルの魔法の粉
春色のオムレッツを焼く蒔蘿草
チューリップ赤揺れてから白揺るる
雨粒が窓に円描く春の虹
祖母の忌を知らせるやうに牡丹咲く
水玉の服を子に買ふ桜餅
蜜柑の木米寿の父が植樹せり



桜は日本の国花、古来日本人に愛されてきた。単に桜といえば、ソメイヨシノを指す場合が多いが、山桜や八重桜など300種以上あるらしい。

ソメイヨシノは、3月末から4月初めが見頃で、薄桃色の姿は格別可愛らしい。咲き始めは恥ずかしそうに、満開の頃は、もともと花の房が所狭しと密集し、豪華絢爛である。花の命は短くて一週間ほどで花吹雪となり風雨のなすままに散ってゆく。花の下では、いつの時代も皆、笑顔である。

蔵の街

上岡佳子

見世蔵の奥に展ぐや菊花展

「見世蔵」とはもとと商品を見せるための蔵で店舗兼住宅として使われた土蔵造りの建物である。

ご在住の栃木市の大通りには江戸時代に商人たちが競って建てた見世蔵や土蔵が多く残っていると作者は語られている。

その見世蔵の一つで菊花展が開かれていた。黒漆喰の重厚な佇まいと菊の華やかな色とのコントラストが美しい。

白壁に色の付きさう 蔦紅葉

水運でも栄えた栃木市。巴波川^{うすまがわ}の土蔵だらうか、白い土壁に赤い蔦が絡まっている。川の照り返しも相まって「色の付きさう」と自分の言葉で表現した一句。

秋灯早や土蔵造りの支局かな

調べたところ下野新聞社栃木支局のことらしい。もととは見世蔵で、その中でも江戸の面影を残した比較的古い建物だそう。27年前から支局が置かれたとある。

「秋灯」の季節が情景をより際立たせている。

冬帽の見入る 歌麿三部作

この句の前に「深川の雪」が詠まれている。「品川の月」「吉原の花」とともに歌麿の肉筆画三部作として知られている。三部作とも栃木の豪商からの依頼で栃木の地で描かれたとされている。

掲句は「見入る」で冬帽子の人物に読み手も加わってその絵と一緒に見ているような気持ちになった。

連作に「蔵の街」栃木の町並が十分に伝わってきた。

雪に暮らす

北浦詩子

肩に来てふわり雪虫二三匹

北国では「綿虫・雪螢」のことを「雪虫」と呼ぶことがある。別に「雪虫」が存在するのでややこしいのだが、これから長い冬がやって来る。その使いのような儚い「雪虫」が肩のあたりに来た。厳しさばかりではない冬の到来を作者の優しい目が捉えた。

ただ「ふわり」は文語表記なら「ふはり」。

いちどきに白線消ゆる雪の朝

道路に引かれた「白線」だろう。ほとんど雪の降らない地に住む筆者には想像もつかないが、ニュースを拝見するとこのような景は決して珍しいことではないらしい。「いちどきに」「白線消ゆる」が言い得て妙である。

結水の川辺に小さき水の音

気温が氷点下になると水溜りやバケツの水そして水道管が凍り始める。さらに気温が下がると川や沼の動いている水も、海さえも凍る。

そんな凍りついた川辺に水の音を聞き留めた。まだ水の流れが生きていることに作者は気づき句に仕立てた。情景が見える句である。

春隣午後の明るさ 縹色

おそらく連日雪降りのどんよりとした空が続いていたのだろう。しかしその日のお昼過ぎになってふと気づくといつもより明るい陽射しが降り注いできた。長かった冬がようやく過ぎ、もうそこまで春が来ている。その時の空の色を「縹色」と表現。雪に暮らす人々の生活の有り様を感じ取ることが出来た。

私のこの一句

トルソーの厚き胸板 青嵐 紅露恵子

平成30年11月号の句です。心の奥の苦しみと闘う日々の中で的一句でした。宮の森の「本郷新記念彫刻美術館」へ暑さの中、急な坂道を登り、静かな館内と野外彫刻に心を預けました。トルソーは頭部、腕、脚を欠いた胴体部分のみを表現した彫刻です。孤独とともに力強さを強調するものとされ、「厚き胸板」と「青嵐」の取合せは私にとって必然でした。

今年になって、まるで導かれるかのように石狩の浜辺近くの野にある彼の作品と新たな出会いがあり、心が大きく揺り動かされています。

花うばら窓に干しあるトウシューズ 大内マキ子

バレエ教室を開いて30年になる。子供から大人迄の生徒がレッスンに来ている。バレエを始めた子の憧れは、トウシューズである。魔法の様に爪先で立って踊る先輩達を見て心がときめく。3年間の基礎練習を学びやとトウシューズが履ける。練習後シューズから血が滲み出る事もあるが、頑張った勲章と思いながらシューズを洗って干す。バレエが好きだから乗り越えられる。今年の秋には発表会が行なわれる。バレリーナー達の踊りが楽しみである。

行先は冬の虹立つあの辺り 小川明美

月二回の吟行が15年程続いている。静岡市内を中心に、時には東海道線を利用して県内各地に足を伸ばしている。

この日、静岡駅から安倍川、藁科川沿いにバスで30分北上車内の「あつ、虹!」という声で、参加の10名が車窓に虹を探した。あの辺りが今日の吟行地と思い、すぐメモ帳に残した。

吟行で作った句を読み返すと、その時の天候、自然、仲間や地域の人との関わりが思い出される。この吟行では、狷夫の方から猪の肝の干したものをいただいた。「胃の葉にせよ」と。

灯の雫星のしづくや橋涼み 豊田高子

浅野川大橋の一つ下流の中の橋（一文橋）に佇み川面を眺める。川上の医王嶺は暗く沈み、主計町の瓦斯灯が放つ「灯の雫」がぬめぬめとした水面に滴り、妖しく揺らめいている。その光の尾に鏡花が描いた「化鳥」の羽撃きや「照葉狂言」の異界の気配を幻視した。「星のしづく」が降り注ぎ天上の清浄と地上の艶めかしい光が川面で溶け合う……鏡花の愛した「女川」の情念と一体となる様な幻想的な橋涼みだった。令和7年度「万象」全国俳句大会で小林名誉顧問特選。「枕草子」ならずとも「夏は夜」である」との選評を頂戴した。



沢木欣一の指標と信念（一）

中山純子

昭和二十一年五月、金沢の地で同人誌として創刊した「風」は、二十六年三月をもって風作品は沢木欣一の選、すなわち主宰誌の形態に移行した。その三月号の「風作品」の選後感に、沢木欣一は次のように所信を述べている。

「本号より僕の単選になりましたが、今後風作品中より何処に出しても恥しからぬ充分な実力のある新人を輩出させたいと念願しています。はじめに僕の選句態度、基準を書いて置きます。

第一に写生、或は写真、レアリズムを重んずること。自己の感動から勿論句が生れるのであるが、表現技術としての写生をしっかりと身につけてなければ絶対に感動を表現することが出来ない。写生というのは簡単に言えば対象に即した感動を、それに最も適当な、その時一回限りの動かない言葉で描写することであると思う。勿論俳句は十七字形式であるから言葉で描写すると言っても自ら散文と異なった言葉の煮つめた使い方が要求される。あいまいな意味ではなく表現技術としての写生を怠っているのは実作の上でいくらせつかちに素材や事柄を追求しても真に俳句を新しくすることが出来ない。しっかりと技術を身につけること——技術と言

っても宙にぶらさがって誰でも利用できるというのはなく、その人自身に即さねばならないが——俳句に限らず音楽でも何でも少なくとも初歩の教程本に五年や六年打込まなければ本格的に自己を表現することは出来ない。俳句の方ではこの頃この基礎技術の修練が一般になおざりにされているように私は思う。それではいくら複雑な感動を蔵しても絶対に表現出来ない。だから私は言い古された言葉であるが、俳句の表現の骨格をなす写生或はレアリズムを一にも二にも望みます。

第二に俳句が散文でなく韻文であることを銘記していただきたい。散文でもフローベルの言のように唯一回限りの描写が要求された表現ということは厳しいことであるが、詩に於ては一層の厳格な言葉の使い方が要求される。俳句は最短詩型の故に最も言葉に対する慎重さがなければならない。一語一句もゆるがせにしないで言葉を丁寧に使用していただきたい。言葉を生かしてほしい。

以上二つのことをごく簡単に書きましたが、これは何もむづかしい注文ではなく極めて初心のしかも何十年やってきた人にも適用することだと思えます。大変常識的なことのようにですが、この二つをすっぴかしては進歩はあり得ないと私は確信します。」

（次号に続く）
「子規・写生——没後百年——」（沢木欣一編 角川書店より抄出）

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③⑤

橋本 清

み吉野の 象山さきやまの際きりの 木末きぬえには

ここだも騒く 鳥の声かも (六・九二四)

ぬばたまの 夜よのふけゆけば

久木ひさぎ生ふる 清き川原かはらに 千鳥ちどりしば鳴く (六・九二五)

「み吉野の象山の山あいの梢では、何と沢山の鳥が鳴き騒いでいることよ。」

「ぬばたまの」夜が更けて行くと、久木の生えている清らかな川原に千鳥が頻りに鳴いている。」

山部赤人が行幸に従駕した時の長歌に付けられた二首の反歌です。年月等の注記はありませんが、神亀2年(七二五)5月、聖武天皇が吉野離宮に行幸した時のものと見てよいかと思えます。

二首ともに離宮を取り巻く風景を描いています。一方は日中、もう一方は夜間の情景です。掛軸になぞらえれば、二つで一对の双幅でしょうか。叙景というと、普通は視覚によるものを指しますが、こうした聴覚を主とするものもあります。

詩歌における叙景は、客観的事象の単なる描写ではありません。その事象の背後にある何ものかを暗示していません。その「ここだも騒く」の「サワク」は、多くのものが一つにまとまることなく、落ち着いていない状態

を表します。ここは様々な種類の鳥がまるで山全体を揺り動かすかのように鳴き騒いでいる様子です。そんな生き生きと躍動する雄大な情景を描くことで、その山を望む離宮の威容を暗示しているのです。

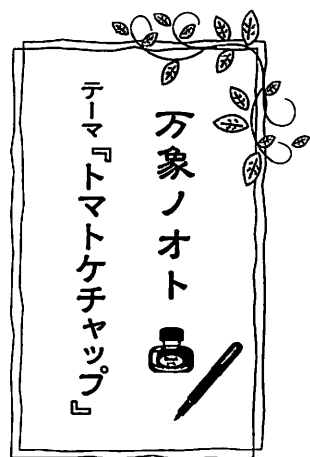
「清き川原」は、昼間目にした、谷間の清流が洗う川原。そこに鳴く千鳥の声は、かすかに、しかし、谷川の鳴り響く音に紛れることなく清澄に、離宮を包み込む静寂な夜の闇の奥から聞こえて来るのです。それは離宮の清浄な美しさを暗示しています。私は後世の茶の湯の精神を言い表す言葉、和敬清寂の清寂に通じる美意識を、そこに感じます。

「象山」は、吉野離宮があったと考えられる、奈良県吉野町宮滝の南正面に見える山。「久木」については定説がありません。

閑しづかさや岩にしみ入る 蟬せみの 声こゑ (芭蕉)

「奥の細道」にある一句。山形の立石寺での作です。慈覚大師円仁(七九四〜八六四)が開基したこの寺は、山寺の通称で呼ばれているように、宝珠山という山全体が境内で、堂塔伽藍は山の上に建てられています。

時は元禄2年(一六八九)5月27日(太陽暦7月13日)、「麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる」と、うるさく聞こえるはずの蟬の声がまるで岩肌にしみこんで行くかのように聞こえて来たというのです。そんな不思議な感覚が、いかにも由緒ある霊場にふさわしい、荘厳にして清浄閑寂な古寺のたたずまいを暗示しています。



発祥の地・横浜

横浜 岡 元枝

私が幼い頃は戦後で、我が家にはトマトケチャップは無かった。氷を入れた冷蔵庫で、父が自転車で氷屋へ大きな四角い氷を買いに行ったものだ。

東京のレストランで初めてオムライスを食べたのは小学生の時で、美味しかったことを思い出す。トマトケチャップのラベルには、「明治時代にアメリカから洋食文化と共に日本に伝わった」と記されている。発祥の地は横浜市神奈川区新子安で、記念として碑がたっているそうだ。

オムライスやナポリタンの味付け、ハンバーグ等のコクとまとまりが出て、家庭の定番となった。缶や瓶からチューブ入りと、扱い易い容器になり、減

塩など添加物が控え目のニーズが高まっている。

今では、冷蔵庫のドアポケットにほかの調味料と共に整然と並んでいる。

オムライスの思い出

静岡 筑地裕子

物心ついた頃より我が家には、トマトケチャップが置いてありました。土曜の昼ご飯に母の作ってくれるチキンライスがとても楽しめました。四人姉妹だったので、中華鍋で一氣に作れる、頃合の献立だったのかもしれない等と、大人になって思ったりします。

私の子たちに、ケチャップ料理はと聞いてみると、ナポリタン、オムライス、ハンバーグ、チキンライスと次々と出てきました。

母の思い出の料理はと聞くと、三人の子供たちは全員一致でオムライスと答えました。卵の上にケチャップでそれぞれの名前やハートやスマイル等を描き、親子で楽しみながら作ったのを思い出しました。我が家の料理に欠かせないトマトケチャップは、今日も冷蔵庫にどっしり座っています。

トマトケチャップ

札幌 島崎 洋

トマトケチャップというところ「お子様」のイメージがある。

お子様ランチの旗の刺さったチキンライス。オムライスにこれでもかと思ひに描くケチャップ文字。私の思うところ、ハヤシライスやスパゲティナポリタンにはケッチャップ率の高いものとブラウンソース率の高い物があり、ケチャップ率が低いと「大人の味だ」とのたまう。

でもよく考えると、ケッチャップもソースも元々はトマトが原料。

「結局同じなんだよ」と弁解しつつ、たっぷりケッチャップをかける。

そうです、実はケチャップが大好きなんです！

幼き頃

徳島 山本晴美

私が3歳の頃でしょうか、母と二人ある食堂に暮らしていました。時折、厨房からトマトケチャップと玉葱を炒める匂いがしてきました。

初めてケチャップを知った日のことです。フライパンの上で、パチパチとよい音と香りがしました。あれから大好きになったのです。

トマトにはカロチノイドのリコピンが多く含まれています。高い抗酸化作用を有することから、癌や老化の予防に効果があると言われているので、意識して食べたいと思います。

徳川家康の言葉で、「長生きも芸の内」という教えがあります。医師の指導のとおり、食生活と運動を大切に生きて行きたいと思います。

オリジナルが大事

武蔵村山 松井宣夫

80年代、アメリカで暮らしていた頃のことです。定時に帰宅してもやる事が無いので夜間スクールに行くことになりました。日本の定時制と一緒にある日英語クラスで小断を作る課題がありました。その中でこんな話を作った生徒がいました。

あるトマトの親子です。お母さんトマトとその子供たちが散歩に出かけます。お母さんは「リトルトマト」

に色々注意しますがリトルたちはよそ見ばかり。モタモタしている間に車に轢かれてしまいそう。うしろを振り返ったお母さんの一言。「まあ！早くしなさい。ケチャップ達！」英語では、「遅れずについて来い！」は「キヤッチ・アップ！」というのです。当時は実に上手いと思ったのですが、オリジナルはデズニの初期アニメにありました。俳句でもオリジナルを知ることが大事ですね。

ケチャップ消費日本一

仙台 富田洋子

仙台が昨年トマトケチャップの消費量日本一の称号を頂き、嬉しく驚いております。笹かま、秋刀魚、牛タンなら合点がゆきますが、昨年は米の爆値上がりで、麺類、パンなどに移行したせいかなどと思いました。

よく考えてみると仙台は濃い目の味を好む人が多くお店のナポリタンも麺が見えない位たつぷりのケチャップの絡んだナポリタンです。我が家でも冷蔵庫になくてはならない常備品です。

ナポリタンは勿論、ミートソース、ロールキャベツ、オムライス、カレーなどの隠し味にも結構使用しています。孫たちもケチャップの効いたミートソースが大好きです。

やはりあの甘酸っぱい味は母の味、初恋の味、郷愁を感じさせる味ですね。日本一の称号を頂き、万歳です。学食のナポリタン選る新入生 洋子



「万象ノオト」投稿募集

▽11月号「スマホ」(7月末日締切)

▽12月号「玄 関」(8月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

遠富士



『遠富士』

柳澤宗正

四六判・上製・カバー装
オリジナル

定価 2,970円

ISBN 978-4-86737-342-2

富士見ゆる居間や二人の七日粥

なんと穏やかで豊かな句であろうか。居間より遠富士を見ながら夫婦二人で、無病息災を願いながら七草粥を食す。今生の今ある幸せを噛みしめているのであろう。そんな二人に、富士は日本の霊峰として、独立峰として厳然に、また崇高に、暮らしを豊かにしてくれている。

帯文に、我が家の居間より、箱根の山々と丹沢山塊を左右に従えるように富士が聳えるところがある、そんな暮らしを切り取った、またこの『遠富士』の句集を代表する一句と言えるであろう。善なる詩情が美しい一句とも言える。

この本この一句

栗林明弘 (『春野』主宰)

遠富士や伸び縮みして鳥渡る

雪煙上ぐる富岳や初御空

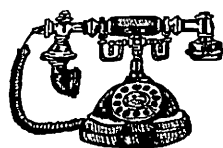
掲句二句も、遠富士のある暮らしを慈しむまなざしが見え、本句集名を彩る大景の句となっている。

著者は昭和十三年長野県生まれ。平成十四年の「万象」創刊と同時に入会、三十年からは同人会長、現在は顧問を務められている。創刊会員として、ずっと「万象」を支えてきたのであろう。その著者が米寿記念に上梓したのが本句集である。

あとがきには「……この句集はいわば、俳句で綴る我が後半生」とでもいうべき記録であり、前書が多いのはこのためである」と記している。本句集の一つの大きな特徴はこの点にもある。前書はむやみにつけないのが原則と一般的に言われ、前書は少ないものが多いが、句集は個人のものであるから、いろいろな形もあってもいいのかと思う。読む側にとっては興味がそえられる句集である。

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

○辞書を繰る指の乾きや目借時 郡河川 高山ひさ子

こんがりとホットサンドや朝桜

擬宝珠の芽のつんつんとあかね色

花の雨兄の遺せし四点杖

港より長き汽笛や花の雲 焼津 小梁洋子

ひとり居のなかなか忙し彼岸過

○桜蝦干すや潮の香の甘く

群れ咲きてなほもさみしき一輪草

獅子に座す文殊菩薩や桃の花 栃木 飯塚キミ

○花辛夷釉薬の鉢泥まみれ

手塩皿の土筆の御菜飴色に

蒼天や棚を真白に梨の花

○里山の土の香強し雪解川 静岡 杉田義則

薄水を避けて手水や神籤引く

春雷や仁王不在の大草鞋

ひし餅や小さき指あと二つ三つ 静岡 石川直樹

主なき小さき庭に花馬酔木

○陽炎にピエロの笑みの愁ひかな

浅春の眼鏡の曇りそのままに

春雨や腹に染みたる白湯一杯

○竈やサウナに掛かる砂時計 金沢 菅原雅子

縦横の風まぜこんで春田打
足音に波紋重ねて春の鯉

みどり児の甘き匂ひや春満月

春雨の音柔らかき子守唄 札幌 石田 睦

高枝より響く囀足軽し

春キャベツまるまるちぎり浅漬に

たつぷりと枝に朝日や囀れる 佐藤麻利子

鉛筆を並べて削る日永かな

ランドセルやや撫で肩で入学す

雨上がり土手は一面路のたう 島崎 洋

日脚伸ぶ猫の駅長巡回中

リモートの会議で欠伸目借り時

起きあがり空に向かへり春の草 杉山和廣

敗者にも小さき誇り松雪草

お日様の水に溶けゆく春野かな

ふるふると首ふるばかりゆきのはな 杉山鈴子

草々の根のほぐれゆく春野かな

つくづくし群れて兵士のごと立てり

鳴の水脈数限りなく交差して 竹重富子

雪解野にはや半袖の子ら遊ぶ

鳥曇岸にたゆたふゴムボール

嬰兒の生命線や風光る 札幌 田邊政代

足指のぐーちよきばーや山笑ふ

○床蹴つてシンバル鳴らす木の芽時

ガラス戸を音立て過ぎる春一番 土門 一平

バス停の隅に残雪積まれたる

ふきのたう知つたかぶりの園児たち

スニーカー履き替へて行く春の道 土門 一

公園の残雪僅か子らの声

胸を張り卒業生の並びをり

路味噌のおこげにぎりに母偲ぶ 新庄 曾野部礼子

みちのくの山ざわめきて芽ぶきかな

残雪を木霊の崩す鳥海山

新入生先づ訪ふ魯迅学舎跡 東北大学二句 仙台 富田洋子

旧学舎の硝子のゆがみ白木蓮

古書店の開けつ放しや花の昼

城濠に白き波ある花見かな 新潟 齋藤 信

○ぎこちなき会釈を交はす新入生

黄梅や軒下にある三輪車

梅園の椅子ゆづり合ふ昼下り

新潟

榊原キヨ子

刻むより千切る齒さはり春キャベツ
大きめの苺を選び母忌日

佐藤幸示

亡き妻の褪せたる遺影春日影
囁るる鴉 一声 春の空

八重桜の小さき芽吹き鳥居脇

高塚先子

手仕事にいそしむ背や春日向
水仙の皆日に向かふ窓辺かな

山田季聰

草餅の杵にふつくら白化粧
風乱し夕暮惜しむ春の蝶

雛もみに絡みからまれ蝶狂ふ

燕 渡辺志ま

補聴器のはづれてゐたり目借り時
つくばひのぬめりを落とす入彼岸

春陰やクレーン的首伸び切つて

甲高き声あげ雉子車道過ぐ

敷石のすきまに根付く花なづな

○金次郎金次郎像の本の春塵払ひけり

止めどなき友との会話難巡り

鹿沼

渡辺利子

水仙の芽を閉ぢこめし土竜塚

遠き日の父の作りし庭芽吹く

植ゑ終へしじやがいの畑へ夜の雨

鹿沼

渡辺利子

玄関のリースに仕立て花ミモザ

連翹の枝先光る黄の満ちて

鶯の声を真似たる園児かな

佐野

仲山さよ子

朝霞たちまち山の池被ふ

山笑ふダム湖に映ゆる大吊橋

木の芽山パラグライダー五基五色

義本美智江

○山裾の水底占むる蟻の道

杉山の榎山積みや露の莖

見はるかす土手はるけしや花の雲

志木

汐見克彦

逆光のなかにかがよふ猫柳

ばしやばしやと浅瀬の鯉や春の川

螢烏賊活きが決め手の酢味噌和へ

森山洋之助

児ら燥ぐ陽射しの好きな芝桜

○混乱の時代に生きて干鰯焼く

真つ直ぐに桜吹雪の散歩道

所沢

小橋川和子

目覚むれば庭の柿の木芽吹きけり

パンジーの朝の光に咲き乱れ

噂やままごとの子等食事どき

千葉

岡本秀子

靴紐にじやれつく子犬夏近し

佐倉 鈴木隆久

花の雨肩で分け入る縄暖簾

デュエットはアルト・ソプラノ囀れり

千葉

加藤浩子

初蝶へ小さき手伸びるベビーカー

鶯の声に押されて出勤日

成田

宮本うらら

扉より花のひとひら舞ひ込めり

先を行く犬振り返る花吹雪

酒々井

小林あけみ

千物屋の裏の川沿ひ初桜

朝市の春をとんびのひと回り

地鎮祭土を離れぬ小灰蝶

佐倉

新谷八郎

足指はぐうとばあとや青き踏む

○小流れは路の匂や路を採る

うぐひすや一日二本の秘境駅

有泉正夫

○春風やがらくた市の鬼の面

砥部の皿厚くぼつちやり路のたう

上下左右枝を揺らして杉の花

尖つてつんつん刺す葉クロッカス

杉田富美代

春風や首に明るいスカーフを

火の色を納むる大地下萌ゆる

佐倉

鈴木隆久

雨水かな鍬入るる土やはらかく

桜餅真白き懷紙花透けて

目隠しをとれば目覚むる雛かな

鈴木美根子

紅の濃さの増したる落椿

○啓蟄や壁駆け上がるレスキュー隊

目の前をとんでいきたる赤とんぼ

船橋

近藤澄子

紫陽花のすがしき色のそこかしこ

初夏の旅夫の遺影を胸にだき

早起きし髪ととのへて桜見る

山口秀吉

鳥の巣をパイプに作る我が家かな

デイサービス仲間を偲ぶ桜かな

スコップに利き足かけて春耕す

柏

鹿毛満子

若葉風車夫の太股ばんばんに

露座仏の手に子雀の跳ねるたり

芽吹きたる雑木林の明るけれ

村田由美子

マニキュアは少し派手めに紫木蓮

重き膝はげまし仰ぐ桜かな

狒犬の爪の先なる余寒かな

松戸

寿多映子

唐破風の緑青伝ふ春の雨

○休業の屋形船打つ春の波

松戸

渡部洋子

ピンク着て今朝の笑顔や養花天

○胸を張り伸ばす背筋や竜天に

林試の森くらきをたどり胡蝶花^が咲けり

東京

鶴田智美

小米花やさしき風の立ちにけり

霊園の古木ごつごつ花の雲

東京

安藤美酒々

白壁に枝垂るさ緑柳の芽

花見船ぬつと現れ言問橋

三月や肩の大傷癒えぬまま

若き医師若き看護士梅の花

梅が香や楽園となる小病院

遅き日の友より来る便りかな

旅立ちや白鳥帰る北の国

日差し受け喇叭水仙芽をだせり

山の畑背くらべして葱坊主

雲雀鳴く土手の向かうはゴルフ場

疲れ来て山路にいとしすみれ草

夜桜や名入り提灯辿る道

膝折りて御室の桜三分咲き

嵐電の吊革揺るる花嵐

あと一人待つ灯の下の菜飯膳

大場八朗

蕪木静子

北口富栄

齊藤孝夫

高野翠子

宴あと桜葉降る水たまり

○ぐいぐいとへりに近付く奴風

啓蟄や重機の剥がす屋根瓦

縁石のひびに噴き出す踊花

アノラック脱ぎて作業の清掃員

○玄関に続く靴跡春の泥

近道の頬かすめたる花の枝

養花天恩師の墓碑に愚痴を言ふ

師の御霊オルガンに乗り春灯

○点滴の母の窓辺へ花の雨

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

長谷川はるみ

平子甲奈

満開の枝垂桜に迎へられ 東京 前川 昇

師の植ゑしみつば躑躅の育ちけり

横浜 大駒泰子

欠け地蔵に水仙二本供へられ

朝の雨小さき宿の山桜桃

宮崎正義

落椿行くをためらふ小径かな

裸木の桜の古木見得を切り

切株に赤色にじむ春の雪 調布 荒井 仁

早梅や女ののこす息細き

○添ひ寝して春灯に母小さけれ

川沿ひを歩みて出会ふ桃の花 三鷹 南場雅子

くつろげる桜の下のベンチかな

ランドセル桜の園に迎へられ

軽やかに貨車のことと柿若葉 府中 竹村晃子

宝くじ当たる夢見ぬ四月馬鹿

薬のつんつん尖るくぬぎ森

降誕会長女授かる日となりし 日野 松原悦子

土地勘の残るふるさと笑ふ山

畦塗の仕上げを老いに任せたる

鳩渡る横断歩道花曇 青梅 横井一美

湯に入れて色鮮やかに新若布

道端の小松葉の葉の大きいなる

珈琲をゆつくり淹れて桜散る

とんがった黒い革靴初出社

巢作りの鴉一途に葛引けり

校庭に並ぶ鉢植ゑチューリップ

千切れ雲風に流れて山笑ふ

親の背を越えて少年入学す

花の昼押さるるままに弁天堂

機関車へ子等の喚声花の風

桜咲く橋くぐり行く手漕ぎ舟

庇から御降りの音消えにけり

裏庭を鳩の飛びたつ初御空

大寒や草木に水をたつぷりと

川岸に沿うて菜の花明りかな

朝厨採りしばかりのレタス割き

カロライナジャスミン蕾む垣手入れ

○鐘の音のこもれる枝垂桜かな

雨垂れの落つる静けさ壺すみれ

つくしんぼ子等の散らばる休耕田

青き踏む踏みし一步は力こめ

横浜

岡 元枝

坂本具子

柴田雅春

茅ヶ崎

久保田富士子

伊勢原

山本カツ子

松田

古谷悠紀子

啓蟄や石のぬくみに小虫寄る

薄墨桜ひとひら過去をほどこけり

涅槃西風ガルダの嘴を掠めをり

幼子の髪に春の日透き通る

銅製の鷹拭く主春日差

切り貼りの花びらの透く春障子

○青白く先をとがらせ春の月

吹く風に香りを乗せて五月かな

十五歳のガッツポーズへ春来る

薫風にくすぐられたる蕾どち

花時の歩幅の合はぬ二人連れ

天井に迫る雛壇可睡斎

初蝶の反転しつつ塀を越ゆ

木の芽風小田原城の濠抜くる

春の寺大樟に手を翳したる

木蓮を愛づる主や今は亡き

春めきて刺子の糸の薄紅

梅の香を纏ひて子らの鬼ごっこ

○たんぽぽの踏ん張つてをり女坂

すべり台に並ぶ子の声花の昼

飯田優子

石川真利子

伊東文恵

海野俊彦

大木政子

奥川裕美

小米花風の行方を追ひにけり

草青む足裏に土の弾みをり

ふらここや空に吸はるる笑ひ声

桜守熊手片手に挨拶す

花の昼弁財天よりジャズ聞こゆ

春時雨耳欹てて句を紡ぐ

白梅の空の青へと香を放つ

農小屋に翁鎌研ぐ雨水かな

春日受く櫓の白に目を細め

稜線を朱色に染むる春の月

顔隠すほどの花東卒業す

春の風邪夫に熱きお粥かな

後輩の作る輪潜り卒業す

受験子の母の遺影に手を合はす

春一番吹いて点滴終はりけり

○亀鳴くや顔ばかりなる油絵展

吊るし雛に囲まれてをり道真公

呼子鳥薩埵峠の切通し

ひと仕事終へて見上ぐる春の星

春昼の窓ぎはの席芙蓉峰

杉山巳代

高井明子

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

中澤祐一

長島富美子

散髪の鏡に映る内裏雛

春浅し癖字の便り信濃より

静岡

永島美佐子

川底にあやなす光春近し

置き去りの自転車木の芽風の中

春光や雲棚引ける天城山

永田公香

百千鳥堤飛び交ふ日和かな

開帳の金の観音のぞきけり

桜詠む晶子の歌碑へ春の燭

長谷川洋子

句作する卓へ落花の盛んなり

春耕の軀ラジオを聞きながら

助手席にひとひら春を迎へけり

福島章友

○ドアノブを伝ひて今朝の花の冷え

夜桜の誘ひに負け二合瓶

ふつくらと陽射し含ませ耕せり

掛川

鈴木美由紀

春の鴨風吹くままに汀へと

白日に照るなまこ壁蜥蜴出づ

川根

鈴木裕一

障子穴洩るる春日のやはらかき

山葵田の水道直す漢かな

菱餅の形まちまち飾りたり

金沢

上野富貴子

姿見に脱ぎてまた着て雪の果

知らぬ間に老女となりて古雛

花日和の朝に行くや母の家

金沢

北野陽子

春愁の一日を終へて母の庭

能登の山雪割草の咲いてをり

AIの告ぐる弥生のさくらの日

新出祐子

桜一分木の輪郭をはやなせる

四月馬鹿レンジに卵破裂して

○蜆貝一夜の鉢に音微か

田上ナツ子

池の辺の薄日に尖り菖蒲の芽

春泥を我が物顔に犬駆くる

大試験終へて家族の笑顔かな

廣田宏美

春日差す一日家中開け放し

春潮や夜明けの空のもしも色に

前身頃の幅を手直す花衣

宮崎恵美

み吉野へ夫と連れ立つ花見かな

四阿に座して八十路の花見かな

遠近に汚れて残る春の雪

かほく

能任康子

猫留守の二日一人の春炬燵

外出はゆるく巻きたる春シヨール

菜の花やダム湖に映ゆる水明り 白山 鶴尾正江

野薊を摘みて夕餉は母の味

夕映えの照らす残雪際立ちぬ

篠笛のかすかな音色涅槃西風 敦賀 川口和代

難解の数式解けず春眠し

風やさし堅香子の花群れゐたる

一片の花弁浮きしワンカップ 奈良 町田すみれ

靴紐を固めに締めて新社員

花の寺氷みくじに吉の文字

猫の目の何やら愛し漱石忌 徳島 林 早苗

桜咲き幼駆け出す赤き靴

時忘れひとりの時間蜩汁

手作りのパンの届きし春の夕 山本晴美

祝米寿幸多かれと桃の花

実朝忌午年の絵馬溢れたる

日溜りの中洲に遊ぶ春の鴨 山本瑤子

○渦巻ける海峡の空鳥帰る

耳元に鶯の声堰渡る

雨上がり眩しき空を初つばめ 小松島 田上幸子

手から手へ三万体の雛納め

国宝の社殿背に潮干狩 三好 内田孝子

はくれんのわつと咲き出す日曜日

千の芽を風に遊ばせ猫柳

ゆつくりと時の流れや春日傘

何もかも控へめが良し豆の花 細田良子

紙芝居見し公園の初桜

コーヒ―はペルーの豆よ町うらら 福岡 園田清子

山頂の寺の見事な山桜

花筏白さぎ一羽吞まれをり

宿坊のお話会よ花盛り

耳の日とや雨音もなき雛の夜 鶴田輝代

○恋猫の硝子戸越しの持久戦

朝影に緑輝く芹一叢

祖母からの赤飯届き今日卒業 門川 請関ゆかり

朝三分昼は七分の桜かな

山肌に淡き色さす山桜 国富 山口孝治

校庭の葉種畑に羽音かな

花漬のスタンブめいて飯の上

春初め空爆流すカーラジオ

眠る子の口が開きてうらけし 那覇 稲嶺有晃

休止符を置く春昼のピアノ曲

遺訓語る声の掠れや清明晴

○どかと寝る河馬の親子や風光る 那覇 高嶺容道

うりずんや蛇が出るてふ御嶽道

清明祭うからの長の逝きにけり

○海の色残して能登の桜貝 宜野湾 宜野 顕

春禽の鋭声を高く旅人木

うりずんの路地の渦風立ち話

春分や官邸前のデモに集ひ ベルリン 森尾 舞

サザエさん通りに湯屋やあたたかし

○風光る乙女のうたふ反戦歌

〈新会員の紹介〉

4月の加入者です。

小林 典子様 静岡県静岡市

正田 華子様 東京都立川市

第25回

俳句四季大賞

片山由美子

『水柿』

第14回 俳句四季新人賞

加那屋こあ

- 第26回俳句四季全国俳句大会結果発表
- 受賞作品・選評・選考座談会を掲載
- 新人賞最終候補者発表

※今月の華

杉山加織／山田耕司

※巻頭三句

坪内稔典／鳥居真里子

阪西敦子／福神規子

堀之内長一／二川茂徳

※俳句と短歌の10作競詠

宮崎莉々香＋丸田洋渡

※人と作品

山田貴世句集『草の花』

※「四季」私の源流

中島斌雄 妻・綾野道江

第9回 俳句四季新人奨励賞

稲葉守大

押見げばげば

柊木快維

第13回 俳句四季特別賞

内村恭子『多神』

※好評連載

伊野孝行

人はなぜ風景を描くのか

吉川千早

俳壇ランドスケープ

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

藤村公洋

俳句のつみみ

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

俳句四季
Haiku Shiki

2026年7月号

6月20日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

北から南から

川崎宿

神奈川 大久保 進

川崎市内には芭蕉の句碑が5基あり、江戸時代の川崎宿を偲ばせる記念すべき遺産の一つとなっている。

元禄7年5月、芭蕉が江戸から故郷へと旅立つ際に、門弟たちと六郷川（多摩川）を渡り川崎宿に入った。一行はだんご茶屋で別れを惜しみ、句を詠み交わしたとされる。その折、芭蕉が返した句が今に伝わる。

麦の穂をたよりにつかむ別れかな 芭蕉

この句碑は数度の移転を経て、現在は京浜急行八丁畷駅近くに落ち着いている。周囲には四季折々の花が彩りを添える。

最後の旅へと向かう途次の八丁畷に建つ「麦の別れ」の句碑はよく知られるが、川崎宿の近くにはなお2基の芭蕉句碑がある。

川崎大師の境内、八角五重塔の奥につるの池があり、そのほとりに句碑が建つ。

父母のしきりにこひし雉の声 芭蕉

高野山で詠まれた句で、行基菩薩の古歌「山鳥のほろほろとなく声きけば父かと思ふ母かと思ふ」を踏まえている。

稲毛神社は、御神木の樹齢も古く、川崎の守り神として知られる古社である。芭蕉の句碑は赤い大鳥居の手前に建てられている。

秋十とせ却つて江戸をさす古郷 芭蕉

『野ざらし紀行』の冒頭、旅立ちに際して、〈野ざらしを心に風のしむ身哉〉とともに詠まれた句で、六郷の渡しにて江戸を離れる感慨が込められている。

縁あつて川崎に住みついて30余年。八丁畷の「麦の別れ」の句碑は家から程近く、目にする機会も多い。これからも身近な吟行地として、川崎宿の名所旧跡や芭蕉の足跡を辿ってゆきたい。

麦秋や川崎宿の芭蕉句碑 大久保 進

万象作品の佳句

江見悦子

辞書を繰る指の乾きや目借時 那須川 高山ひさ子

蛙が人の目を借りてゆくので、人には眠くてたまらなくなる時がある。そんな俗説に基づいた俳諧味のある晩春の季語が「目借時」。作者は句作中なのか、言葉を探してあれこれと辞書を繰っているうちにやって来た眠気、ふっと指の乾きを感じた。インディアペーパーと呼ばれる非常に薄い感触が実感。「指の乾き」と「目借時」の取合せに意外性がある。

桜蝦干すや潮の香の甘く 焼津 小梁洋子

日本の桜えび漁は、静岡県の由比漁港と大井川漁港でのみ許可されている。漁期は年に2回、駿河湾で水揚げされる高級な食材である。この句は富士川河川敷の景だろう。広大な河川敷が天日干しの桜えびでピンク色に染まり、潮の香りが満ちている。その香りに甘さを感じたという作者。実感であろう。「桜蝦」という呼称から連想が湧く、桜にもまがう鮮やかな薄紅色と、甘い香りに詩情が生まれた。

花 辛夷 釉薬の鉢泥まみれ 栃木 飯塚キミ

他の作品から、陶芸家で「風」「万象」の同人だった故生井慶子さんの「こぶし窯」を訪ねた時の句であることがわかる。シンボルの辛夷の開花に出合ったのだろう。主を亡くし

た地には釉薬を溶いた鉢が泥まみれになって転がっている。かつては益子の陶芸家が集まって窯焚きをし、沢木先生も記念の皿に何回も揮毫をなさっている。辛夷の木は、盛んだったかつての時代から今まで、季節になると花を咲かせてくれる。的確な写生から、過去を懐かしみ惜しみ気持ちが伝わってくる。生井さんへの鎮魂歌でもある。

里山の土の香強し雪解川 静岡 杉田義則

早春、北国では積雪が溶け始め、野や畑の土もろとも川に注ぎ込み、川は濁流になって勢いよくほとばしり流れてゆく。そこに「土の香」を嗅いだ作者。「強し」にダイナミックな自然の有り様が表現された。北国ならではの春の到来を捉えている。

陽炎にピエロの笑みの愁ひかな 静岡 石川直樹

広場に演技するピエロに感じた春の愁ひ。ピエロの姿は春の空気の中で揺らいでいる。チャールズ・チャップリンの映画「ライムライト」の場面が蘇った。「ピエロの笑みの愁ひ」は、切なくも悲しい。

霾つちよろやサウナに掛かる砂時計 金沢 菅原雅子

霾は黄砂が降ること。春の季節風によってモンゴルや中国北部の黄土地帯で舞い上がった砂塵は日本にまでやって来る。曇った空の下、蒸気の籠もったサウナでの時間は砂時計の砂によって刻まれ、休む時がない。別世界のようなサウナの不思議な安らかさ、静けさを詠んだ。

床蹴つてシンバル鳴らす木の芽時 札幌 田邊政代

演奏の最中、奏者が木の床を蹴つて弾みをつけシンバルを鳴らした。辺りは木々の芽の息吹であふれている。シンバルの音が本格的な春の始まりを告げるようだ。春の訪れを喜ぶ明るさに満ちた句。「床蹴つて」の具体性が良い。

ぎこちなき会釈を交はす新入生 新潟 齋藤 信

誰でもが経験したことのある場面。新入生は中学生か、高校生か。入学式で同じ列に並んだものの、何とあいさつしたら良いのか、或いは教室の座席が隣同士になった生徒と何をしゃべったら良いのか。交わす会釈がぎこちない。新しい学校生活が始まる緊張と期待を詠んだ。

金次郎の本の春塵払ひけり 芳賀 福武幸子

今は見かけることも少なくなつたが、かつては小学校の校庭に、薪を背負つて歩きながら本を読む二宮金次郎の銅像が置かれていた。金次郎は農村復興・財政再建に力を尽くし、昭和初期の修身教育「勤勉・儉約」の理想的なモデルとされた。見れば銅像の説む本の上に春の砂埃が積もっている。今は掃除もされずに捨て置かれているのか、気が付いて払つてやつた作者の動作が見える。

山裾の水底占むる蜷の道 佐野 藤本美智江

山からの水が麓を流れている。透き通つた底には「蜷の道」が。蜷は細長い巻貝で長さ3センチほど、ここでは川蜷。春になると動きが活発になり川底を這いまわる。その跡が道のようになるところから「蜷の道」が「蜷」という季語の副

季語となつた。蜷の幼虫が好んで食べる。このあたり、6月には蜷が飛びかうことになるのだろう。

小流れは露の匂や露を採る 佐倉 新谷八郎

露を採りに流れにやつて来るとあたり一面露のかおりが漂っている。そんな中で露を採る。帰つたら板刷りをしてあくをとり、水で煮てから筋を取り薄味にさつと煮る。或いは佃煮にする。手間の省けない食材だが、香りが爽やかで初夏の味覚である。

玄関に続く靴跡春の泥 東京 長谷川はるみ

門前で泥を落とさぬまま、野遊びから子供が帰つて来た。見ると、あとには靴底から剥がれた泥が真直ぐに散らばっている。決していやな泥ではなく、そこに春の訪れを感じた。

亀鳴くや顔ばかりなる油絵展 静岡 中澤祐一

「亀鳴く」が季語。ただ亀には鳴くための器官がない。遊び心と想像力に溢れた季語である。「顔ばかり」とはどんな絵なのか。自画像かもしれないね。壁面を埋めた顔に囲まれているといささか不気味でもある。「亀鳴く」との取合せで俳味のある句となつた。

渦巻ける海峡の空鳥帰る 徳島 山本瑤子

渦巻く鳴門海峡とその上に広がる果てしない空、北へと返つてゆく鳥の群れ、壮大な世界を切り取った。

海の色残して能登の桜貝 富山 宜野 顕

どんな経緯で能登の桜貝が沖縄の宜野さんの手に渡ったのか、可憐な桜貝に日本海の色を感じ、沖縄の海の色との違いを思っている。情感豊かな句。

新中央句会報 (4月例会)

令和8年4月26日(日) 東京文化会館

(出席21名)

江見 悦子 選

ひと葉散りまた散るひと葉竹の秋 柳澤宗正
若葉風ばらして磨く音楽器 榎本文代
丹沢山も富士山も失せたり蠶ぐもり 久留島規子
稚児百合を揺らす峠の風少し 一由久美子
傾いて回る地球や春愁 三屋英俊
初夏や朝の厨に鳴るケトル 中村千久
チューリップの通路を急ぐランドセル 南雲秀子
日をはじき風をはじきて柿若葉 榎本文代
茶摘女の籠満たしゆく小半時 塗木翠雲
筍を食むやしやくしやく音たてて 久留島規子
風まかせやがて淋しきしやばん玉 大久保進
④通ひ来し句会上野に春惜しむ 榎本文代

⑤通ひ来し句会上野に春惜しむ 榎本文代
「通ひ来し句会」とは、「万象」創刊以来20年続いた「中央句会」と、令和4年4月から同人句会と一本化して始まった「新中央句会」を指すのだ。会場は上野の東京文化会館と決まっていた。会館の大規模改修により、4月の句会を最後に、

5月からは大妻女子大学千代田キャンパスに会場を移すことになっている。この句には俳句と関わって来た作者の心情が詰まっている。情緒的な「春惜しむ」の季語が生きた。

稚児百合を揺らす峠の風少し 一由久美子

「稚児百合」は、丘陵の林床に生える高さ10センチから30センチの多年草。晩春、茎の先に白い花を下向きにつける。名の通り、可憐で小形の花である。この句の舞台は、昔から近在の人々が行き来した峠ではないか。風が少し出て稚児百合を揺らしている。心に沁みる情景を句に仕立てた。

チューリップの通路を急ぐランドセル 南雲秀子

小学校の登校風景だろう。ランドセルを背負った小学生が、門から昇降口までの通路を急いでいる。一年生も一緒だ。通路には何色ものチューリップが開き、子供たちを明るく迎えている。「喜びだけを持つてゐる」チューリップは誰をも和ませ、幸せな気分にくれる。

筍を食むやしやくしやく音たてて 久留島規子

「しやくしやく」という擬音語に感心した。いかにも美味しそうだ。筍は部位によって硬さや風味が違ふ。作者が賞味している筍は丁度良い噛みごたえなのだ。句の筍の美味しさに大いに共感した。

中村 千久 選

ひと葉散りまた散るひと葉竹の秋 柳澤宗正

若葉風ばらして磨く管楽器

榎本文代

丹沢山も富士山も失せたり龜ぐもり

久留島規子

陸奥の一挙にひらく花林檎

塗木翠雲

傾いて回る地球や春愁

三屋英俊

節太の指に黒文字桜餅

大久保進

日をはじき風をはじきて柿若葉

榎本文代

春惜しむ仕掛け時計の鼓笛隊

江見悦子

友を待つなんじやもんじやの花の下

南雲秀子

蜆売る浦安なまりの老婆かな

松井宣夫

運河土手染めて降りつぐ桜葉

内田郁代

④ 風まかせやがて淋しきしやばん玉

大久保進

④ 風まかせやがて淋しきしやばん玉

大久保進

芭蕉の「やがて悲しき鵜舟哉」を裁ち入れた感じの一句だが、混沌とする世相を思うと何か切なくなつた。屋根まで飛んで壊れて消えた「しやばん玉」。「風まかせ」、他人まかせのこの国の行く末もまた、どこか淋しいもののように思つたのだ。

若葉風ばらして磨く管楽器

榎本文代

今月号の「風音集」に、この作者の「トロンボーン伸ばして引いて春うらら」がある。掲句の「管楽器」も、「ばらして」手入れするとなると、長いスライドを持つトロンボーンが思い浮かぶ。磨かれた金色の楽器に、季語の「若葉風」が

美しく働いている。

傾いて回る地球や春愁

三屋英俊

地球の軸が公転面に対して23・4度傾いていることは理科の時間に習つたとおり。掲句の季語を「春愁」としたことが意味深長である。国際法などどこ吹く風と、文明が築き上げてきた様々なものが壊されてゆく現状に、作者は、この地球がいつかひっくり返るのではないかと、そんな心配をしたかもしれない。

榎本文代選

膝掛けに花散る宵の人力車

鹿毛満子

ひと葉散りまた散るひと葉竹の秋

柳澤宗正

春惜しむ野にぺんぺんと草鳴らし

三屋英俊

節太の指に黒文字桜餅

大久保進

近く春や地獄の釜の蓋あをく

一由久美子

若葉風麒麟の首を吹き抜くる

柳澤宗正

友を待つなんじやもんじやの花の下

南雲秀子

弁当を開くれば寄り来雀の子

長谷川信也

ジグザグに燕飛び交ふ駐屯地

塗木翠雲

金蘭の咲き初むる杜急斜面

桔梗 純

花の雨伝言板に「帰ります!」

中村千久

④ 丹沢山も富士山も失せたり龜ぐもり

久留島規子

④ 丹沢山も富士山も失せたり糞ぐもり 久留島規子

糞（つちふる）は黄砂が降ること。中央アジアの砂漠から偏西風に乗って日本に運ばれてくる砂塵である。富士山を据えた山並を隠してしまうほどの黄砂が降った日は、太陽もかすむほどになる「糞ぐもり」である。

ひと葉散りまた散るひと葉竹の秋 柳澤 宗正

春の終りになると、風に誘われるかのように竹の葉がひらひらと落ちてゆく。「ひと葉散り」に呼応するかのように「また散るひと葉」と、上五から中七へ続く言葉の調べが美しい。竹林の静けさも伝わって来る。

逝く春や地獄の釜の蓋をあく 一由久美子

「地獄の釜の蓋」に一瞬戸惑ってしまうが、「キンランソウ」という植物の別名である。シソ科の多年草で濃紫の可愛らしい花が地面を這うように広がって咲く。初めて聞いた花の名に驚き感動した作者の思いが、「逝く春」の季語に託されたように思う。

今後の新中央句会の予定

▽7月は夏休みとさせていただきます。

▽8月30日（日）大妻女子大学 G棟 411室 13時より

薄荷飴日月譚

中村千久

プリズムに少年の日の夏の色

日本の子どもに「虹は何色？」と聞けば、直ちに「七色！」という答えが返ってくるし、児童画にある虹は、みつしりと太い棒のようになるのかもかわすに、律儀に七色の弧で描かれている。ところが欧米の子どもに同じ質問をするとその答えはまちまちなのだと、慶應大学名誉教授の鈴木孝夫先生が「ことばと文化」という本に書いていた。それぞれの文化によって色の捉え方は様々であるという話だった。

掲句は教室の机に置き忘れられたプリズムを覗いたときに出来たもの。中に見えた光の輝きは、子どもの頃に遊びまわっていた夏の日を思い出させるものだった。青山墓地で蟬取りをしたり、2B弾と呼ばれた火花を飛ばしたり、三角ベースに夢中になっていた少年時代……あの頃の夏に私を取り巻いていたキラキラした世界の色がそこにあった。

浦和の句会に出したときは見向きもされなかったけれど、句会の後に飛高先生から、

「あのプリズムの句は君でしよ。すぐに分かったよ。浦和であんな句を作るのは千久さんきりいないからね。」

と言われたことも懐かしい。

句集「薄荷飴」を出すとき、相談に乗っていたいたっていた内海良太主宰（当時）から、「薄荷飴」の句と並べて最初のページに載せるといいと言われた。だから即物具象の写生とは言えないようなこの句は、偉そうな顔をして巻頭に坐っている。

* ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

第19回「万象」千葉県支部

俳句大会 報告

日時 令和8年5月9日(土)
会場 船橋市勤労市民センター
参加者 27名(県外からの参加8名)

爽やかな五月晴れの吟行日和となりました。千葉県内の同人・会員はもとより江見主宰を始め東京・埼玉・神奈川からのご参加を頂き、賑やかな大会となりました。

吟行地は船橋市内。船橋の由来は海老川が、かつては大きな川で橋を架けるのが難しかった。そこで小舟を数珠つなぎに並べ、板を渡して橋の代わりにした。この「船の橋」が「船橋」と呼ばれるようになったとされています。人口65万人の中核都市です。

市内には船橋大神宮、灯明台、海老川河口、船橋港、寺町、ララポート、東照宮など見どころが沢山ございます。沢辺たけし千葉県支部長の開会の言葉に続き、江見悦子主宰、中村千久編集長のご挨拶を頂き予定通り大会を開始しました。

参加者の投句・選句は共に四句。選者は全員十句選。選終了後に各選者から有意義な選評をいただきました。選者より特選受賞者へ短冊贈呈を行い、田中道江千葉県副支部長の閉会の挨拶の後、集合写真を撮影して賑やかな大会を終了致しました。

江見悦子主宰 特選

天 薔薇の路地底引網を繕へる 榎本文代
地 水門の上の歩道を白日傘 奥 太雅

中村千久編集長(埼玉県支部長)特選

天 大神宮青条揚羽ばかり来る 久保村淑子
地 引き潮の潟の起伏も薄暑かな 鈴木隆久

沢辺たけし千葉県支部長 特選

天 五月来ぬ祈る両手の腕まくり 鈴木隆久
地 散松葉東照宮は方一間 内田郁代

榎本文代神奈川県支部長 特選

上げ潮に鵜の羽拡ぐ船溜り 奥 太雅
桔梗純東京支部長 特選

散松葉東照宮は方一間 内田郁代

山本とく江 特選

海遙か灯明台に新樹燃ゆ 喜多恭仁子
内田郁代 特選

夏空や木の間に光る灯明台 鹿毛満子

三屋英俊 特選

聖五月木洩れ日遊ぶ宮土俵 穂苅照子

(中嶋久登記)



「万象」組織と業務分担（令和8年7月から）

事業担当（令和8年度）

- ・ 創刊二十五周年記念全国俳句大会実行委員長 中村千久
- ・ 第25回新人賞 事務局 中村千久
- ・ 第25回新人賞 選考委員 江見悦子 砂地宏子
- ・ 第24回「万象俳句賞」事務局 榎本文代 中村千久
- ・ ホームページ担当 穂田美穂子 穂田照子
- ・ 俳句カレンダー担当 大木 茂 桑原優美子

「万象」会議構成メンバー

主宰・編集人・総務担当者・会計担当者
名簿担当者・同人会代表（幹事長）

「万象同人会」

- 会 長 中條睦子
- 副会長 沢田たけし
- 幹事長 内田郁代
- 会計 小池清晴
- 監査 榎本文代
- オンライン同人句会担当 北浦詩子

主 宰	江見悦子
名 譽 顧 問	小林愛子
顧 問	福島せいぎ 柳澤宗正
発 行 人	江見悦子
編 集 人	中村千久
同人作品選者	江見悦子
万象作品選者	江見悦子
総 務	久留島規子 砂地宏子
会 計	小池清晴
名 簿 管 理	塗木翠雲
監 査	塗木翠雲
編 集 集	
編 集 長	中村千久
編 集 係	久留島規子 神田美穂子 砂地宏子
	松井宣夫 高田みや子 大木 茂
	宮崎正義
校 正 係	喜多尾明子 古川京子 一由久美子
	成瀬真紀子
月例俳句作品 受付	
・ 同人作品	榎本文代
・ 万象作品	佐藤 和子（10月25日/切分より）
	林 陽子

ルビーの小函 (7月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 4 海芋(かいう／カラー)
- 7 榮螺(さざえ)
- 8 蔓延り(はびこり)
縋る(よる)
花棟(はなおうち)
- 11 東雲(しのめ)
- 12 毬藻(まりも)
料峭(りょうしょう)
梢(うれ)
馬欄(ませ)
三和土(たたき)
- 13 日照雨(そばえ)
轆轤(ろくろ)
縹色(はなだいろう)
妣(はは) *亡母
- 14 竹樋(たけひ)
花檣(はなしきみ)
撫仏(なでほとけ)
奪衣婆(だつえば)
涅槃西風(ねはんにし)
- 15 蟾(ひき)
雉子(きぎす)
旅苞(たびづと)
- 16 誘ふ(いざなう)
- 17 水草生ふ(みぐさおう)
過り(よぎり)
- 18 扱く(しごく)
- 19 仕舞屋(しもたや)
老酒(ラオチュウ)
学舎(まなびや)
饑(さより)
- 21 噪ぐ(はしやぐ)

- 23 抽斗(ひきだし)
鬱金(うこん)
蠶(つちふる)
- 24 溶岩(ラバ)
雀の帷子(すずめのかたびら)
可惜夜(あたらよ)
帷(とばり)
泛ぶ(うかぶ)
- 25 野梅(やばい)
梳り(くしけずり)
- 26 夢裡(むり)
奥処(おくど)
- 27 蘊蓄(うんちく)
求肥(ぎゅうひ)
- 28 凭れ合ふ(もたれあう)
舫ふ(もやう)
- 29 静寂(しじま)
蜚(あま)
- 45 潮(うしお)
- 46 白湯(さゆ)
嬰兒(みどりご)
- 47 囁る(しわがうる)
- 48 砥部(とべ) *砥部焼
- 50 山桜桃(ゆすらうめ)
藁(ひこばえ)
- 51 欅(そばだてて)
薩埵峠(さったとうげ)
- 52 汀(みぎわ)
四阿(あずまや)
- 53 背(そびら)
- 58 蠶ぐもり(よなぐもり)

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰・小林愛子名譽顧問の句

「初蝶」5月号に（6月号にて閉刊）

欣一の白鳥の句に年惜しむ 悦子

「たかなん」5月号に

昼時の都電混み合ふ冬うらら 悦子

「しろはえ」第36号に

父の丈はるかに越えて御慶かな 悦子

生き得たりうすがみを解く花びら餅 愛子

「俳句展望」春号に

やはらく裂け朝顔の紺の朝 悦子

小さき嘘重ねしひと日曼珠沙華 悦子

冬風や薦メビウスの輪を低く 悦子

「鷹」5月号の「俳壇の諸作」に小林愛子

名譽顧問の句の鑑賞（田上比呂美氏筆）

ジョン・レノン忌日を熊の眠らずに 愛子

「万象」2月号より、十二月八日はジョン・

レノンの命日。同じ十二月八日の季語に開

戦日や臘八会があるが、季語を使うときに

私にはレノン忌が一番しっくりくる。世代

によるのか。

昨年から熊が冬眠せずに住宅街に出没し

て、人的被害も多く出ている。温暖化にも

よるが、生息地に餌となる木の实がないか

らだとか。そのために駆除される熊も多い。

熱狂的ファンにより銃弾に倒れたレノン。

熊もまた銃弾により駆除されている。眠ら

ないがために永遠の眠りにつかされる。

「季節風」3・4月号に

令和七年度「静岡市民文芸」奨励賞受賞

村の子のトーチ高虫送り 藤本節子

廃線の伸びに伸びたる夏の草 本多ひとみ

巫女舞の少女の伏し目夏果てぬ 松永博子

「月刊俳句界」4月号

「沖」主宰野村研三氏「こを直せば入選」から

論談の尽きず櫓の木追加する 中北良子

尽きることのない議論の傍らで、燃え続

けるように焔に「櫓」を足した。「追加する」

という表現が、少し直截的な表現なので「櫓

を足す」という表現に直してみた。

↓論談は白熱したり櫓を足す

なまはげや台本とほり子を泣かす 栗原ただし

上五で「や」の切字を使っているが、中

七、下五となまはげに関連することを詠ん

でいるので、ここは「は」という助詞をを

使った方がよいのではないか。

↓なまはげは台本とほり子を泣かす

第三回大宰府天満宮奉納全国俳句大会に参加

大穂追雲さんの朗誦が余香殿に朗朗と響

き長谷川權先生の講演は「おくのはそ道、

三つの謎」。謎解きの答えの多くは第四回

の大会に持ち越され、次回が楽しみです。

事前投句の小澤實・川越歌澄先生の本選

一掬に釜鳴り鎮め初手前 年虹

吟行句の谷口愼也先生の本選

都賀の五郎やなんじやもんじや咲く 年虹

飛梅や神籤の色は四季の色 美山留唯

（金沢 杉本年虹記）

俳誌「初蝶」閉刊のお知らせ

6月号（通巻五百号）を以て閉刊される

旨、中山和子代表からお知らせが来まし

た。残念なことです。石田波郷を師系とし、昭

和59年11月、千葉県鎌ヶ谷市で創刊されま

した。「万象」千葉県支部では大変お世話

になりました。

「文学の森」（月刊「俳句界」刊行）が倒産

「俳句界」編集長より、倒産した旨連絡

が入りました。通巻三五七号の4月号を以

て閉刊とのことです。「万象」では句集刊

行を始めとして、大変お世話になりました。

俳句の総合誌が一つ減ることになり、俳句

界全体にとって大きな損失です。

（報・編集部）

(←この線より切り取ってください)

万象作品

令和八年

十一月号

(八月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (＊の枠内には何も書かないでください)

都または市・町・村名	
姓 号	がふりがな
	年齢

*	
---	--

	*
--	---

[illegible][illegible]

*	
---	--

064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

- ・ 投句は一人4句以内
- ・ 八月十四日(金)必着

2000

都または市・町・村名	がなり	年齢
姓 号		

[illegible][illegible][illegible]

*

165-0022

東京都中野区江古田 4-12-11

一由久美子様

110
円切手を
貼ってください

住所	(〒326-0011) 茨城県大沼田町 916-3
氏名	大木 茂
電話番号	090-2326-5453

編集後記

▽本誌連載の「万葉集」にたずねる抒情の源流」が、本号で35回を数えた。執筆者の橋本清氏は、恩師から引き継いだ「万葉集」解釈をライフワークとされている。毎回、集中にある一首を繙きながら、それを近現代の詩歌に見られる抒情性に繋げてゆく手際には驚かされるばかり。初稿に接する幸せを味わっています。

(千久)

▽かこさとしさんの生誕100年の企画展が上野の国立科学博物館で開催中との記事が新聞に載った。帰省中の72年生まれの娘と50年前に一緒に楽しんだ絵本。62年に発表された最初の科学絵本「かわ」の話に及んだ。親も子も忘れられぬ絵本の一つ。(美穂子)

▽中学一年の7月、野尻湖へ水泳訓練に行った。その時泊まっていた寮から打上げ花火を見た。真つ暗な湖面に華やかな花火が映り、やがてまた静かな暗い湖面へと戻るまでを。時々、その時の暗い湖面を思い出す。芥川龍之介の「舞踏会」の一節が妙にうなずける。(宏子)

▽この頃のAIの進化は凄まじい。あらゆる分野で人間を凌駕してきている。知能、運動能力、また芸術の分野まで。一年前になるが、NHKの特番でAIをとりあげ、その結びで、AIにないもの、欲しいものは何かと訊ねると「肉体。風を感じたい」と答えた。私たちが俳句をする意味はそこにありそう。

(明子)

▽世はAI、AIと喧しい。先日、初めてAIに宿泊場所を指定し2泊3日の旅程を組んで貰った。一日目は5時にチェックインの予定だったが、その時刻にはホテルから130km地点を走行中だった。二日目迄は一事が万事そんな風だった。

(京子)

▽最近詐欺事件のニュースを良く耳にする。ローカルな新聞にも載る。先日留守番電話に「老人の方は1を押してください」というテープの声が。電話番号を見ると、1から始まる国際電話だ。真面目な老人をターゲットにした詐欺と思う。皆様気を付けて。

(真紀子)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二,〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万 象 七月号

第二十五巻 第四号

通巻 第二九二号

令和八年七月一日 発行

主 宰 江 見 悦 子

発行人 江 見 悦 子

編集人 中 村 千 久

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一-三一-六 603

万 象 発 行 所

☎〇三六三三四一五七九六

「万象」創刊25周年記念

令和8年度

「万象」全国俳句大会 「万象」同人会総会

案内

開催日

令和8年10月29日（木）

午前11時（午前10時30分より受付開始）～午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷（東京都新宿区市谷本村町4-11） ☎03-32268101-17

【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会

活動報告・他

全国俳句大会

◆表彰 万象俳句賞

◆披露 令和8年度新同人・大会入選作品（特選句には選者染筆贈呈）

◆講演 坪内稔典氏

一万三千元（昼食代を含む）

申込み費

8月20日（木）までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行（記号）11300（番号）22149281（通常貯金）

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行（店名）138（口座番号）2214928（普通預金）

口座名義 コイケキヨハル ☎03-368115900

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会（希望者による二次会）を予定しています。

大会作品募集

作品

一人4句まで（1～3句でも投句可）

「万象」誌（7月号）巻末綴じ込みの投句用紙をご使用ください。（110円切手を貼ってください）

無料 *締切 8月14日（金）

〒165-0022 東京都中野区江古田4-12-11 一由久美子 ☎090-4746-18632

令和8年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長

実行委員長

江見悦子

中村千久

中條睦子

令和8年度「万象」同人会総会

実行委員長

中條睦子